

見テ二大隊指揮ヲ青柳少佐ニ委シタル後、大佐ハ予備隊ノ位置ニ後退セシムベク決心シ、一応統帥系統上草場少将ニ意見ヲ求メタルニ少将ハ直チニ司令所ニ来リ、
何トカシテ局面ヲ打開セシムルヲ以テ一任セラレタシトイフ依テ一ト先之ニ一任スルコトセリ。

乍然實際ニ於テハ依然トシテ進展セズ。中山陵ヲ奪取セシモ其ハ33 i へ野田部隊が第一峯ヲ奪取シタル後、落梨ヲ拾フタルニ過ギズ。

一、此日砲兵ハ陣地ヲ整理シテ前方ニ進メ又第一峯ヲ射撃スベク野砲一中隊ヲ33 i ニ配属シテ二方面ヨリ第一峯ヲ射撃セシム。

一、中山陵既ニ敵兵少ク（或ハナシ）片桐部隊僅ニ進出シタルガ如キモ大ナル成果ニアラズ。

一、全ク日没ニ至リタルモ昨夜ニ比シテ極メテ静ニシテ逆襲モナク又MG射撃モナシ。恐クハ退却力逃避シタルナラン。

果シテ然ラバ南京城ハ茲ニ第十六師団ノ第一峯及西山占領ニヨリテ陥落ノ動機ヲ造リタリ。

一、深更三時夢ヲ破リテ救援ヲ求ムルモ10 K（独立攻城重砲兵第二大隊15 Kの誤記）大隊本部及第一中隊、集成騎兵隊アリ。

此等ハ南京外線ヨリ又ハ城内ヨリ退却逃避セントスル敗残兵ノ為ニ襲ハレタルモノナリ。

一、後方ナレバ安全ト横着ヲ極メテ警戒モセズ奇襲セラレテアハテ来リタル言ニハ千人トイヒ二千トイフ大ゲサナコトナリ

【中島日記】

多忙を極めた南京陥落その日

昭和十二年十二月十三日、筆者の従軍メモはえらく簡単だ。

「早朝起床。中山陵、中山門夜半に落ちる。直ちに陵へ行き後に門へ行く。輝かしく南京落城の日。同夜は勵志社に一行と泊る。国民政府、軍官学校、大使館へ行く。」

ところが実際はこんなに簡単ではなく、猛烈に忙しい一日だった。新聞やグラフ誌に出た写真をたよりに、この日の行動を再現してみよう。

昨夜は食糧充分で満腹。中山文化教育館の外は銃砲声が激しかったが、夜が明ける頃には静まった。別室の草場旅団司令部の副官から、中山門が今曉我が方の手に落ちたという情報を知った。そうなれば一刻も早く現地へ行かなければならない。

これから中山門へ行くにしても、撮影対象はたくさんあるはずだ。南京城に入っても車は使えないから歩きは覚悟しなければなるまい。したがって腹ごしらえが第一。そこで昨夜の飯盒を調べて、飯の残りを確認する。

撮影準備を万端整え。朝食もそこに、中山文化教育館を出た。途端に右手の山上からチェコ機銃に射たれ、動くことができない。旅団本部の護衛兵が重機を持って出

『飯沼日記』の記述。

十二月十二日 快晴

佐々木支隊ハ当面ノ敵陣地ヲ突破シ前進中。

33 i へ野田部隊ハ紫金山第一峰ノ敵陣ノ一角ヲ奪取、戦果ヲ拡張中ニシテ山上煙ニ掩ハル。

9 D 右翼正面ハ城壁二個所ニ突撃路構成中。

6 D へ第十軍第六師団又西南角ニ対シ攻撃ヲ開始セリト

五・三〇紫金山ハ33 i 之ヲ占領セリ、我母隊ノ軍旗ノ榮譽ヲ揚ケタルヲ喜フ。33 i ハ16 D 中ノ精鋭ナリ。

9 i へ片桐部隊ハ中山陵ニ向ヒ夜襲ス。

佐々木旅団（第十六師団第三十旅団）ハ夕刻先頭ヲ以テ和平門ニ達セリ。

動、チェコ陣地のあたりに向けて射撃を開始すると、とたんにチェコ機銃は沈黙した。

建物の玄関を出ると、目の前の道は灌木が植えられ登り坂になっていて、そこから中山陵は見えなかった。霜柱が立っていて、歩くとサクサクと音がした。坂を登り切ると、その先に中山陵がある。

初冬の太陽は低い、そして光は弱いが暖かく感じた。ともかく中山陵、中山陵と気はあせるが足の動きはにぶい。やっと着いたところで、よく見ると三つ建物があった。当然のことながら、最上階の建物は孫文の像があるはずだ。中へ入ると、孫文の像は椅子に腰をかけていた。白亜の彫刻だ。この場所、この写真を撮るために、はるばる上海から歩いて来たのだと思うと感激した。新しいものがあった。

座像の周囲には、植木が植えられていたのか鉢があった。さらに経文のような作りで、表と裏は厚紙で中には白紙を折りたたんだものが、散乱していた。孫文の功績をたたえた文章が書かれていたのだらう。のち、専門家に尋ねたところ「摺本（しゅうほん）」というものではないかという答えが返って来た。

中山陵の最上部に立って、中山陵の建造物を見下ろす写真を撮り、同時に南京城の全景も撮った。この時、城内からは大した物音は聞こえなかったが、火災の煙だらうか、紫色の煙が棚引き、その煙が初冬の斜めの太陽光線に照ら

し出されていた。

中山陵の三つの建造物は、その外側を孟宗竹でびっしり包み囲まれていた。飛行機の目をカムフラージするためだとか、爆弾が落ちても孟宗竹の外側をすべり落ちるから被害は少なくてすむとか、兵隊諸君の解説は諸説紛々としていた。

ところで陥落直前の南京城内は、どんな状況だったのだろうか。当時（十二月二十日）の「東京日日新聞」（日曜夕刊）に、志村特派員が某外人の日誌の抜粋を、「南京悶絶・戦慄の一ヶ月」と題して伝えていた。一部を抽出してみる。

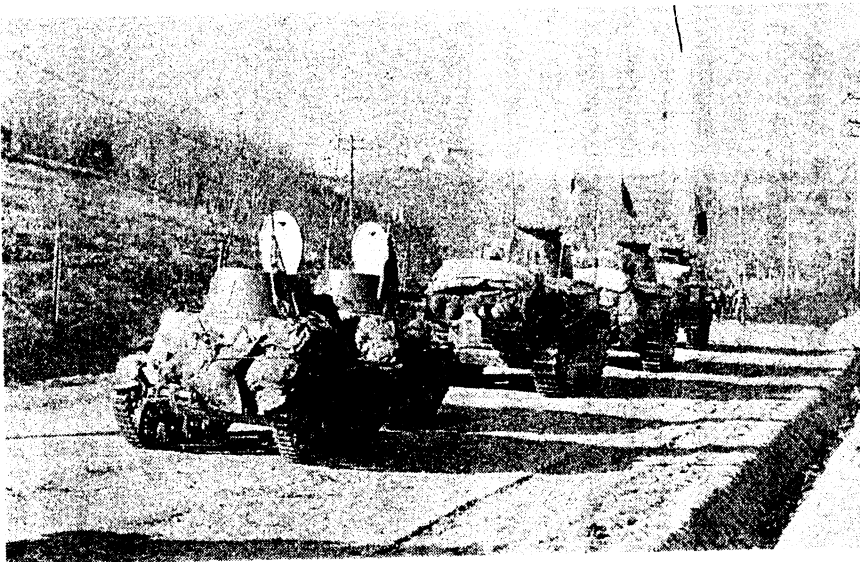
〔南京本社特電十八日志村特派員発〕

「九日 城外猛烈な決戦開かる

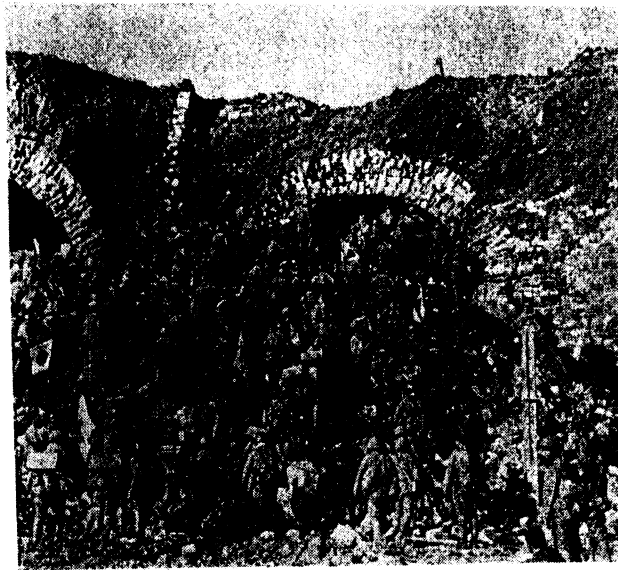
十日 紫金山麓あたり日本軍の軽気球空高くあがり南京全市はこの青色の魚形怪物に心臓の止る思ひをしたばかりでなく、これが合図のごとく支那軍重要機関に銃砲弾雨と注がれ着弾の正確なること驚嘆のほかなく、南京死守三ヶ月を市民に契約した唐生智初め将士いづれも茫然となる。夕陽沈まんとして光華門付近の戦ひ激し

十一日 連日連夜一瞬の休みなく戦ひは続けられ勝算なし水道止る

十二日 城外の支那軍総崩れとなり、八十七師、八十八



遠くに見える中山門から車輛部隊が洪滞。豆戦車部隊は各車ごとに、日の丸を揚げてまるで祭日の東京の市電のよう。



日本軍の砲撃で中山門は大きく崩れ、12月13日早朝から16師団大野部隊が入城した。

が大きく崩れている。

その中山門へ近づいて見ると、門の鉄扉に

「昭和十二年十二月十三日

午前三時十分 大野部隊占領」

と白墨の文字が鮮やかに読みとれた。

中山門内は積み重ねた土囊が崩れて急な坂になっている

師、教導総隊は学生抗日軍を残し市内に雪崩れ込み唐生智は激怒して彼が指揮する三十六師に命じこれら敗残兵を片っぱしから銃殺するも大勢如何ともする能はず、唐生智は憲兵とともに夜八時ごろ何處ともなく落ちのぶ、敗残兵の放火、掠奪なさざるは恐怖に陥る、電燈は消え月光淡くこの世の末かと疑はれる。電話全く不通となる

十三日 城頭高く日章旗翻り午前中に全城日章旗に埋まり銃声次第にやんで日本軍鉄蹄の音高く入城はしむ」

孫文像のある建物を背に花崗岩を敷きつめた参道を、中山門への道を求めて走った。この時履いていた靴は、ハイキングシューズに鋌を打ったもので、参道の石にすべって足を取られそうになったが、ともかく走った。紫金山南麓の中山陵の参道が終わって石造の牌楼が建っているあたりに、徒歩で来た兵隊が大勢いた。中山陵をバックにして記念写真を撮った。

走ること数刻、時計など見るひまはない。上海―南京街道へ出た。そこには車輛部隊が洪滞している。中山門を通過できないからだ。しかし道路路上に停まっている豆戦車は、アンテナに小さい日の丸の旗をなびかせていて、祭日の東京の市電のようだった。

これら洪滞する車輛部隊の間を、すりぬけるようにして中山門へ行こうとするのだが、中山門はこちら側の城壁

崩れた中山門の城壁下には、歩兵部隊の兵隊が列を作って崖のような路を登る順番を待つ。



た。そこを登り切ると大野部隊の軍旗と前後して、中山門の上に出た。

中山門上の兵隊の万歳は、もちろん言うまでもなく軍旗が中心だ。

中山門上の中山東路を見渡せる所に、野砲兵第二十二聯隊（三国部隊）の観測班が、砲隊鏡をセットして中山東路を見ている。

中山門の崩れた城壁の下には、歩兵部隊が大勢集まって登る順番を待っている。そして城門を登りきると兵隊同士で、健在を祝い合い、中には抱き合って喜ぶ者もいた。

入って見ると、老酒（紹興酒）のカメが、壁に二段に積み重ねられている。下にあったカメの蓋をあけて、近くにあったひしゃくで汲み上げて飲んでみた。甘味のある薄黄色の液は、するりとど越しもよく流れ込んだ。
筆者は七合入りの水筒を持っていたので、紹興酒をいっぱい詰めこんだのだった。

この酒屋を出て、さらに中山東路を行くと向こう側を元南京支局長の志村さんが、日本兵二、三人をつれて歩いて来た。そして

「これから国民政府へ行くから一諸に来給え」と言う。国民政府へ行ったら、何か南京攻略を象徴するものが撮影で



国民政府屋上の写真は「支那事変画報」の表紙になった。

中山門から中山東路を撮ったが、城門近くには特に破壊された建物は無く、右側に中国風の建物が一つ、それより遠くにもう一つの建物、それ以外には大きな建物は見えなかった。

三国部隊の砲隊鏡で、中山東路のはるか向こうを見せてもらうと、正面の建物の前をカーキ色の軍服を着た兵隊が、左から右へ移動している。初め中国兵かと思ったが、その軍服の色は日本兵のそれと同じだ。そのうえわれわれが中山門を占領しているのに、射撃して来ないのは友軍にちがいないと納得した次第であった。

中山門上で日本兵の万歳も撮ったが、孫文の像と万歳だけでは、敵の首都を攻略したという、南京陥落を象徴するために何か不足している。

中山門から中山東路には、敗残兵の姿も見えない。中山門を降りて、中山東路の左側を進んで行くと、顔見知りの朝日新聞の連絡員に会った。彼は上海に住んでいて中国人の生活を、筆者よりよく知っているはずだ。筆者独りでは危険かもしれないが、彼を同行者としたら安心だと思った。そこで彼の後を、左側の民家の軒先づたいに進んでいった。しばらく行くと彼が一軒の民家の前に足を止めた。

「東日さん、良いものがありましたよ」

と言うのでその家の前へ行ってみた。すると開け放しになっている入口から、芳醇な香りが外へ流れている。中へ



12月13日、中山門上から中山東路を撮ったもの。高い建物が無くて、上海に比べると風がよく吹き抜ける街のようだ。

きるかもしれないと思った。

長く南京にいて土地カンのある志村さんは、筆者と二、三人の兵隊をつれて細い横丁を右へ左へと曲がって行く。後について行くことしばし、ぱっと広場へ出た。そこには大きな門柱があって、その上には文字が見える。それはまぎれもなく「国民政府」の四文字で、南京占領を証明するなによりのものである。

そこで、志村さんには筆者が持っていた「東京日日」の社旗を、兵隊たち（比土平部隊・山砲第九聯隊第一大隊）には小さい日の丸を持って、門の屋上にのぼってもらった。そして門の上の柱に小さい日の丸を揚げ、志村記者には社旗を振ってもらって、国民政府の文字がはっきり見えるようなカメラアングルで二、三枚シャッターを切った。門の上から降りてきた志村さんと、国民政府の建物の中へ入った。ガランとした講堂のような部屋ばかりで特に撮影を必要とするものはなかった。撮影をあきらめて、門の方へ急ぐと広場があった。そしてその中央にスタンドを立てたオートバイが一台。そばへよってマークを見ると、なんとBMWだ。

どことが悪くて動かないのか、よくわからない。乏しいオートバイに関する知識からすると、キーがない。したがってエンジンはかからないわけだ。そこでチェーンレバーをニュートラルにして、押し始めた。国民政府の門を

出てから中山東路に出て、戦利品としていたこうという魂胆だ。

ところが志村さんが、そんなオートバイは捨ててしまえと言う。その理由は、「本社の飛行機が上海まで来る。十三日南京陥落のニュース映画と、新聞の写真原稿を運ぶためだ。これらの原稿はこれから連絡員が終夜オートバイを飛ばして、上海へ届けなければならぬ。こんな時に動きもしないオートバイを押して、グズグズするな」と。中山門から中山東路を見て、二つ目の建物が中国軍の将校クラブ、勵志社だった。ここが本社の前線本部で中山門が午後四時に、車両が通れるようになったので、五顆松から移動して来たのだそうだ。

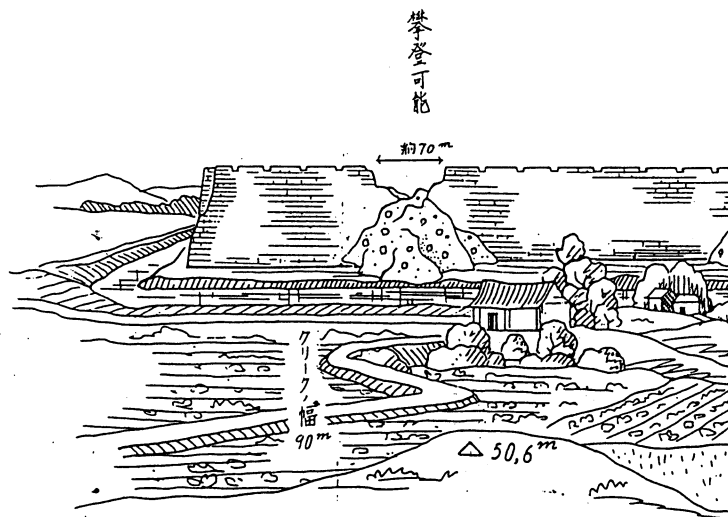
こんなことで、戦利品にしようとしたBMWは道路わきの防空壕の中にひとまず入れておいて、明日あたりとりに来ようと考えたのが浅知恵で、二、三日するとよその兵隊がこれを見つけて乗り回していた。



中山門上のニュース映画カメラマン神原君。

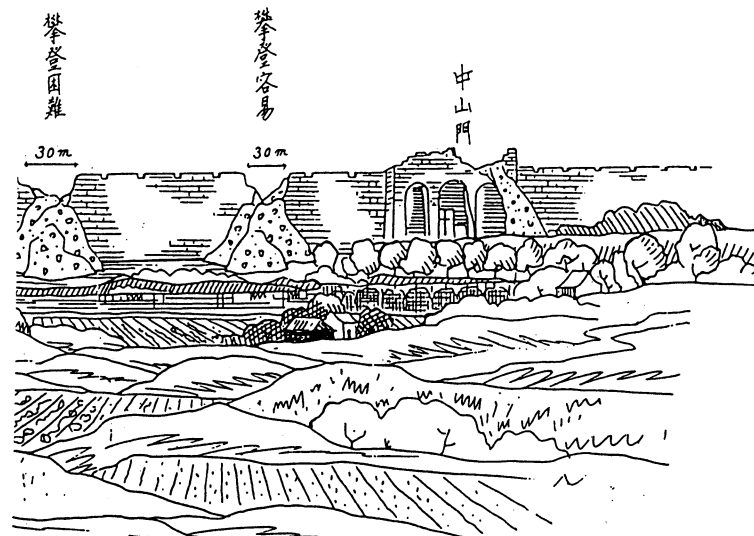
城壁状態圖

(日十六時二時ルケ)



南京東側

(十二月二十)



南京東側城壁状態圖 (十二月十二日16時二於ケル)

中山東路を中山門の方へ進むと、左側にコンクリートの建物有二棟あったが、そのうちの一つに社旗が掲げられていた。

光華門攻撃の協坂部隊に従軍していた金沢喜雄君のフィルムは、金沢君と一緒に高柳記者が持ってきた。高柳記者は光華門から城壁に沿って中山門の方へ来る途中で、敗残兵にバツリ遭ったそう。その途端に大声を上げて「コラッ！」とどなったところ、この中国兵は負傷をしていたらしく、コソコソと逃げていったので命拾いしたと高柳記者は戦場のエピソードを語ってくれた。

この夜、連絡員が上海まで運んだフィルムは、神原君のニュース映画、筆者の第十六師団、金沢君の第九師団、大毎の松尾さんの第六師団関係のものであった。

そして、上海から福岡まで大蔵飛行士のロッキード機が運んだ。南京―福岡間十五時間四十分。福岡から大阪、名古屋、東京へと電送されて『南京占領写真画報』として、新聞表裏二ページの写真号外第一号、第二号と、二回にわたって発行されたのであった。

さて南京へ入城したところで、各部隊に従軍していた記者、カメラマン、無電技師たちが、どこに宿泊するかが問題となった。この時中山門から二千メートルくらい離れた、中山東路に面した鉄筋の建物を選ばれた。これは日本と言えば陸軍将校の親睦団体・偕行社にあたる勵志社の建

中山門の破壊口をのぼって城門の上に出た時、門を内側から眺めることができたが、鉄の扉の内側には土囊がギッシリとすき間なく、城壁の厚さで詰めこまれていた。

八十八師営庭の中国兵“処断”

一夜が明けると十二月十四日の朝だ。筆者が昨夜寝ていた建物は、中山門内の中国軍将校の社交機関・勵志社である。一日前は中山陵近くの山上で寒い夜を過ごしたのだが、今日はなぜか、ここにいる。運命というものが、何となく恐ろしく思われたのであった。

そのうちの師団に従軍していた本社の仲間が続々と集まって来た。そうなると宿泊設備のない勵志社では不便である。そこで南京通の志村さんが、新しいねぐらを探して来た。

勵志社から中山東路を進んで、中山中央路と交差するロータリーの手前にある中国宿だ。その名をよく覚えていないが、ベッドが五十台もある大きな宿だった。第十軍に従軍して歩兵第六十六聯隊（宇都宮）と共に中華門から一番乗りをした「大毎」の松尾さんは、コックの従者をつれていて、われわれ全員の食事の面倒をみてくれたので、幸い飯盒炊さんは免れることができた。

この宿舎前の広場で、全員の記念撮影した。あの顔、こ

物であった。ここなら目下のところ本社関係者は十名だったから、二階建てのこのビルで十分と考えられた。しかし寝る段になって、どこへ寝るかが問題となった。広い部屋の中を見ると、アームチェアなど椅子が二脚あるだけ。

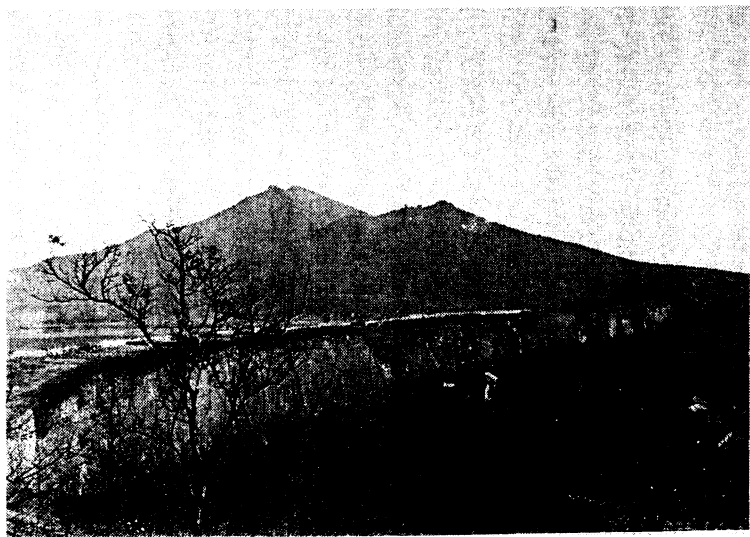
したがってどこへ寝るか、くじで定めることにした。その結果筆者は玉突き台が当たった。見たところフカフカとしてクッションは軟らかだと思ったらとんでもない。若草色のフェルトの下は、石材が敷き詰められていた。大失敗だった。

ところで、中山門の城壁を破壊したのはどんな大砲か聞かされていなかったが、最近『南京戦史』によって、あのお馴染みの「二十四サンチ榴弾砲」だったことがわかった。

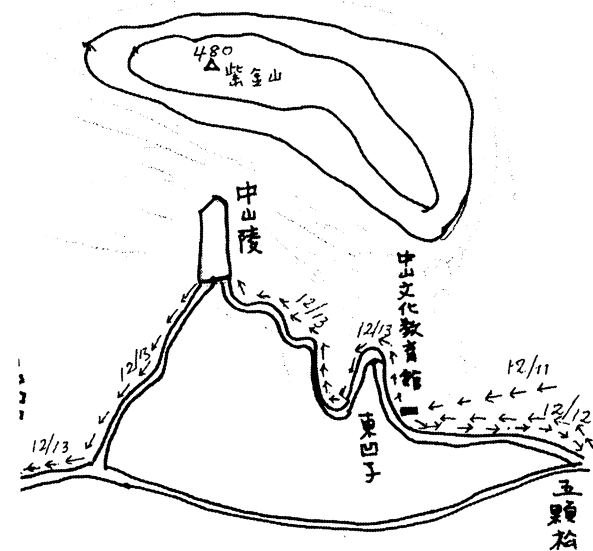
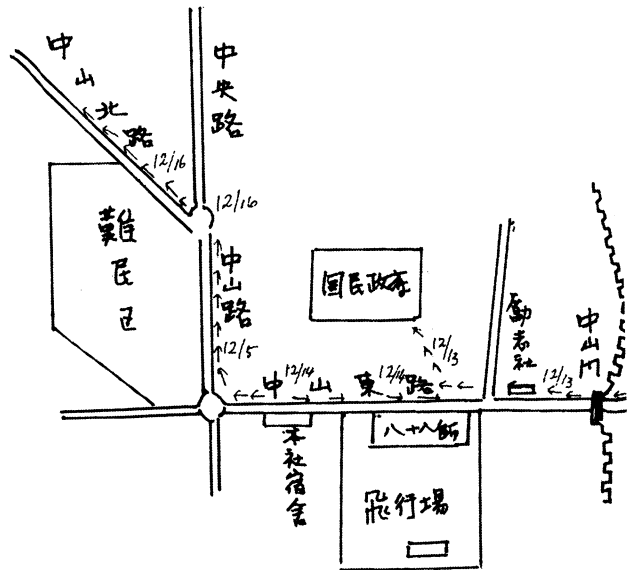
上海戦線の二十四榴は知っていたが、あの重い大砲が南京戦にまでやって来たとは、新聞でも報道されていなかった。私自身も、第一線に近いところで兵隊と行動を共にしていたので、歩兵部隊の取材が主になって、砲兵部隊の活躍は全く知るところではなかった。あの重い二十四榴が南京へ来るなどとは、夢にも考えないことであった。

上海戦線で二十四榴の射撃の実況を見てきたが、炭俵のような砲弾が飛来して、中山門に大きな破壊口をつくった時は、さぞ壮観だったろうと想像する。中国兵も肝をつぶしたことだろう。

顔どれも覚えがある顔ばかり四十一名。この中で、いま存命中の者はわずかに四名。考えてみれば、半世紀近く経っている。その間に日中戦争から太平洋戦争を、そして



12月13日、中山門上から撮影。城壁が中山門から北へ走り、その先には標高465メートルの紫金山第一峰がそびえていた。



戦後の混乱期を駆け抜けて来たわけである。
ともかく全員が何かしら、なすべき目標が無くなってしまいい、ただただ解放感にひたりきっていたのであった。

そんな時、連絡員の一人が勵志社の先の方で、何かやっているのと知らせて来た。何事かよくわからなかったが、カメラ持参で真相を見極めようと出かけた。

行った先は大きな門構えで、両側に歩哨小屋があったので、とりあえず、その全景を撮った。

中へ入ってみると兵營のような建物の前の庭に、敗残兵だらうか百人くらいが後ろ手に縛られて坐らされている。彼らの前には五メートル平方、深さ三メートルくらいの穴が、二つ掘られていた。

右の穴の日本兵は中国軍の小銃を使っていた。中国兵は穴の縁にひざまずかせて、後頭部に銃口を当てて引き金を引く。発射と同時にまるで軽業でもやっているように、一回転して穴の底へ死体となって落ちていった。

左の穴は上半身を裸にし、着剣した銃を構えた日本兵が「ツギッ！」と声をかけて、座っている敗残兵を引き立てて歩かせ、穴に近づくと「エイッ！」という気合いのかかった大声を発し、やにわに背中を突き刺した。中国兵はその勢いで穴の中へ落下する。

たまたま穴の方へ歩かせられていた一人の中国兵が、い

きなり向きを変えて全力疾走で逃走を試みた。気づいた日本兵は、素早く小銃を構えて射殺したが、筆者から一メートルも離れていない後方からの射撃だったので銃弾が耳もとをかすめ、危険このうえもない一瞬だった。

銃殺や刺殺を実行していた兵隊の顔はひきつり、常人の顔とは思えなかった。緊張の極に達していて、狂気の世界にいたようだった。戦場で敵を殺すのは、殺さなければ自分が殺されるという強制された条件下にあるが、無抵抗で武器を持たない人間を殺すには、自己の精神を狂気すれすれにまで高めないと、殺せないのだろう。

後で仲間にこの時のことを話すと、「カメラマンとしてどうして写真を撮らなかつたか」と反問された。「写真を撮っていたら、恐らくこっちも殺されていたよ」と答えることしかできなかった。

このような事件を見たのは筆者だけではなかったようだ。東京から第百一師団に従軍するため、大阪から同じ軍用船で上海へ渡った記者仲間「東京朝日」の足立和雄君がいた。

阿羅健一著『聞き書・南京事件』（図書出版社刊）の中に足立記者との次のような問答が記されている。

— 南京で大虐殺があったといわれていますが、どんなことをご覧になっていますか。

「犠牲が全然なかったとは言えない。南京へ入った翌日

だったから、十四日だと思うが、日本の軍隊が数十人の中国兵を射っているのを見た。塹壕を掘ってその前に並ばせて機関銃で射った。場所ははっきりしないが、難民区内ではなかった。」

筆者が見た場所と足立記者が見た場所は、同じ場所ではないようだ。しかし、同じ十四日の出来事であった。

さて筆者が目撃した場所はどこであったのか、大きな門の写真を撮ったが、その門の上には「駐軍八十八師司令部」の文字が読みとれる。さらに営門の両側の哨舎のうち、右の哨舎には「伊佐部隊・棚橋部隊」、左の哨舎には歩哨の陰になっているが「棚〇〇、捕虜収容所、鹵獲品集積所」という文字が読める。

「駐軍八十八師司令部」の白いレリーフの文字は黒色に塗られていた。その下には横長に「青天白日」のデザインがレリーフになっている。八十八師といえは、中国軍の中でも蒋介石直轄の精鋭部隊として知られていた。

ところで、八十八師の営門の哨舎に書かれている「伊佐部隊・棚橋部隊」とは、上海戦で勇戦し感状を受けた第九師団歩兵第七聯隊第三大隊の通称である。

たまたま刺殺を逃れようとした中国兵の逃走方向は広大な広場だった。その行く手に建物が見えたので連絡員と一

このキャップをねじって外すと針金の輪があつて木綿の紐が結んである。この輪を引くと数秒後に爆発するという仕掛けである。

横たえられている笹竹を見ると、この手榴弾のキャップが外されていて、金輪でいくつもブラ下げられているではないか。うっかり私が笹竹を動かしていたら、あえなく一巻の終わりだったかもしれない。中国兵が南京を撤退する際に、置き土産にこんな仕掛けを考えたのだろう。

八十八師の営門を入り営庭を過ぎてソ連製の戦闘機があったのだから、あそこは城内の故宮飛行場ではなかったろうかと思っている。

「第九師団作戦経過ノ概要」の報告書中、鹵獲品のリストに「飛行機 四機」と出ている。筆者が見たソ連機は、この四機の中の一機かも知れない。

この日が終わると大勢の仲間が、南京から去っていった。バイアス湾敵前上陸に従軍する者や、内地へ帰って南京攻略の従軍報告講演会に出席するためである。

バイアス湾の作戦は、パネー号撃沈事件の余波で米英に気兼ねをして中止となり、全員内地へ帰った。

従軍報告会は、郷土部隊の出身地を中心にして開かれ、どこでも大盛会だった。中にはぼうぼうのヒゲを残したまま、前線生活を彷彿とさせる従軍服姿で聴衆を驚かす者も

緒に行ってみると、建物の前にはずんぐりした単座戦闘機が置いてある。操縦席をのぞき込むとメーターが並んでいたが、見馴れぬロシア文字だ。日本海軍機が南京空襲の時、ソ連機と空中戦を交えたという記事を読んだ記憶がよみがえった。

操縦席のシートに座ってみた。すると眼前に照準望遠鏡らしいものがある。のぞいてみると、中央に十文字の細い線が見える。この望遠鏡だったら、何かの時、役に立つだろうなどと浅間しい考えを起こし、取付け部分にネジがみえたので、取外せたらなどとポケットの中のコインを出し、このコインでねじれば外れるだろうとウンウンがんばったがどういたしまして。本格的な工具でなければ外すことは不可能と悟ってあきらめた。このソ連機はM-16型と、ウロ覚えながら知っていた。

次に裏手の建物は何だろうかと思味があったので回ろうとした。するとわれわれの行動を通せんぼするかのようになり、笹竹が数本横たえてある。何気なしにそれを取り除こうとしたら、連絡員が大声を上げて筆者をとめた。なんと連絡員が指差す所を見ると、手榴弾がブラ下げられていたのだ。

その手榴弾はドイツ製で、上海戦線でもおなじみの木製の棒の先に弾体が付いているやつだ。棒を握って敵陣めがけて投げるのだが、棒の根元に金属製のキャップがある。

いて、新聞販売政策に大いに貢献したそうだ。

第十六師団だけの入城式

十二月十五日 中山門占領から二日たった。南京城内には、まだ敗残兵がいるらしい。それでも難民区に沿った中山北路を行くと、難民区の中から牧師らしい服装をした中国人が出て来た。軍人とは違った服を着ていたせいか、筆者に英語で話しかけて来た。その言うところは、「ここは紅十字会の難民区だから、日本兵は立ち入らぬように……」と言うのだった。

難民区の周辺には、生活力のたくましい中国人たちが、もう露店を出している。白地に梅干しを書いたような日の丸の腕章を左腕につけて、筆者の撮影にも無関心だった。自分の畑で収穫したらしい野菜を売る者、中古の衣類を売る者、餃子入りのスूपを売る者など。

通りかかった日本兵に「兵隊さん、餃子を食べないか、食べたらお金を払ってね」と声をかける。この兵隊は気安く歩兵銃を肩に負い直して、中国人の女が差し出したドンブリを手にした。私は箸を持って水餃子を食べだしたところを写真に撮った。

このあたりでは、子供も日本兵を恐れる様子は見せなかった。

ところで午後二時には第十六師団の入城式があるというので、中山門近くで待っていた。そして入城式は予定どおり行なわれたのであるが、何やら奥歯に物がはさまったような、おかしい感じだった。

後からわかったのだが、各新聞は十二月十六日付の紙面は大見出しの文字を使って、

皇軍・あす南京入城式

前線部隊は昨日入城

などと報道していた。

この紙面を見て、読者は前線部隊とはこの部隊だろうかと、疑問を持つであろう。この前線部隊とは何を隠そう、第十六師団のことである。〇〇の伏せ字はあるが、「大毎・東日」は正確な記事を掲載していた。

あす南京入城式

陸海空一體大軍國繪卷展開

第一線部隊堂々入城

[illegible]

に大殲滅戦を敢行した〇〇〔佐々木〕部隊長以下、片桐、

助川、野田の各殊勲部隊長及び笠井、森、今中、柄沢、松田部隊長、最後に大野部隊、青木部隊が行進序列の後部部隊として日章旗翻へる中山門をくぐって歩武堂々西進し、かくて午後三時入城行進は國民政府に入り、ここで〇〇〇（中島）部隊長の発聲で萬歳を三唱の上かつて蔣介石が政務を執った部屋で一同祝杯を挙げ輝く入城式を終った」

光本記者が書いたように、第十六師団の入城式は、中島師団長を先頭に、歩武堂々と挙行された。この時筆者は中島師団長を先頭に入城して来るシーンを、中山東路北側の高所から撮影した。そのフィルムを連絡員に渡して、上海へ送ったことは、もちろんである。

本社、大阪毎日新聞が、われわれ特派員撮影のフィルムを、全部保存していた。そして検閲済のものは、「許可済」または「不許可」の判を押して、密着焼のプリントを整理保存していた。戦後、第十六師団入城式のファイルを見ていたら、なんと中島師団長の写真には「不許可」の判が押されていたのであった。すなわち、新聞には掲載できないのである。

十二月五日の「飯沼日記」には、「南京入城は各師団個々の入城を禁ずる統制」を示したことが記されている。それにもかかわらず、この禁を破って入城式を敢行したのは、それなりの理由があったからなのだろう。

見出しはそれほど大きくないが、「第一線殊勲部隊、昨日魁の入城式

「第一線殊勲部隊、昨日魁の入城式」

というのである。筆者は第十六師団の北支から始まり中支に転戦以来、南京占領まで従軍していた「大阪毎日」京都支局員・光本記者である。

〔南京にて十五日光本本社特派員発〕

「松井最高指揮官の入城式に先立って紫金山、中山陵の南京正面の主陣地を破った第一線の○○〔中島〕部隊の晴れの入城式が各部隊のトップを切って十五日午後二時半から中山門で挙行された。この日快晴絶好の入城日和数日前まで戦火の真ただ中であつた紫金山も今日は眠るやうに中空に浮んでゐる、中山門東方に入城部隊は続々集合、午後二時城外の丘陵に○○〔中島〕部隊長を先頭に整列を終つた、一方入城式堵列部隊として城外中山陵から一番乗りの大野部隊が堵列してゐる、午後二時半入城行進は開始された、わが砲弾に崩れ落ちた中山門に先駆の騎兵が鉄蹄の音も高く進んだ、井上衛兵長の自慢の髭も今日は一段と威勢がいい、ややあつて馬上颯爽たる○○〔中島〕部隊長だ、見れば心なしか面やつれて赭ら顔の皺も一層深い、上陸後廿余日にして南京城外に軍を進めた部隊長の労苦のほども偲ばれる、ややあつて中山陵、中山門の攻撃に當つた○○〔草場〕部隊長と遠く北方城壁外に迂回して紫金山北方

◇十二月十四日

一、入城式ノ件

予ハ中山門ヨリノ入城ハ肯ンセズ。

ソノ功名ヲ争フ奴隸アリ之等ト共ニ行動スルヲ恥辱トスレバナリ。

十二月九日十日歩兵三十五聯隊〔第九師団〕ノ一大隊ハ紫金山ヲ占領セリトノ報告セルモノアリ。

次デ此聯隊ハ我作戰地境内ニ進入シテ十日――十一日突撃路ヲ開キタル中山門ノ方向ヨリ一番乗リヲ企図シタルコト是ナリ。

師団ノ正面ハ紫金山ヨリ流レタル併行セル稜（稜線）ヲ越ヘ谷地攻撃ニ抱（掛）リテ谷地攻撃ヲ以テスルト此攻撃ハ是非高キ方ヨリ進マザルベカラズ。然ルニ第九師団正面ハ平地ニシテ又敵ノ主防正面ニアラザルヲ以テ速に光華門ニ近（ツ）キ且其扉ノ破壊セラレタルヲノゾキハシタレドモ入城スル能ハズ戦況發展セズ。加之護城河ノ障碍アリテ進ミ難キヲ以テ敢テ他師団ノ区域ニ進入シ來リタルハ背德（背徳）行為モ亦甚シ。

十三日朝我方20（大野部隊）ノ一中隊が午前三時半突入スルヤ

i へ大野部隊へニテハ大ニ憤慨シアリタリ。

次テ十三日夜湯水鎮ニアリタル軍司令部附近敗殘兵ノ攻撃ヲ受ケタルトキ第九師団ハ速ニ步兵一聯隊ヲ護衛ノ為ニ派遣シタル力カ如キハ第十六師団ノ作戰地境ヲ無視シ、タカガ殘兵ニ対シテ步兵一聯隊ヲ出スナリ之ヲ巧言合色の行動ト見ズシテ何ゾヤ。以上ノ

如キ奴ノ団隊ト共ニ南京ニ入城スルコトハ予ノ肯ズル処ニアラズ依リテ予ハ南京入城ヲ彼等ニ譲リテ下関ニ向ッテ転入セントセリ。

然ルニ幕僚間ニハ異議アリタルモノノ如ク師団長ハ屈シテ師団將兵ノ名譽ノ為ニ先登ニ立チテ中山門ヨリ齊々堂々入城スベシトノ意見アリタレバ是モ尤ノコトナレバ予ハ茲ニ中山門ヨリ入城スルニ決セリ。

◇十二月十五日 晴天ニシテ暖、中央飯店

一、既ニ一部掃蕩隊ガ入城シアリタルモ此日新タニ入城式ノ形式ヲ以テ南京占領ノ一段落ヲツクルコトセリ。

一、各隊ハ事後処理ノ任務遂行ニ差支ナキ範圍ニ於テ代表部隊ヲ堵列セリ。師団司令部各部隊長陪〔陪〕從ノ午後一時三十分中山門ヨリ入城シ。

国民政府庁舎ヲ師団司令部ニ充當シアリタレバ同庁舎ニ入り国旗ヲ掲揚シ各部隊長及將校ノ參列ノ上大元帥陛下ノ万歳ヲ三唱シ、今日コソ真ニ樽酒ヲ口ツケ飲〔マ〕ントイフコトニシテ祝盃ヲ挙ケタリ。

一、次デ午後四時頃師団司令部宿舍ニ充當シタル中央飯店ニ入り宿泊ス。(以下略) 【中島日記】

中島中將の日記を見て、十五日の師団入城式の委細が了解された。しかし、戦闘地境を越えたことが、師団長の面子にかかわったことは、筆者のような民間人にとっては、申訳けないが、わかったようであらう。

グ・コートが届けられていて、ここでそれに着かえた。

この時、筆者は「東京日日新聞」の写真班として、同僚二名と共に社の車二台で横浜駅で待機していた。まず列車から降りた宇垣大將を閃光電球を光らせて撮影したが、横浜駅の地下道はニュース映画のカメラマンも来ていて、押すな押すなの大騒ぎだった。

宇垣大將は待たせた車に乗り、走り出した道路は東海道、今という国道一号線。深夜のこととて他に走る車はほとんどいない。宇垣大將の乗った車を中心に、各社の車がダンゴ状になって疾走した。

車内の大將を撮影するため、車を並行して走らせる。カメラを窓から出し、ファインダーをのぞいて、チャンスが来るとシャッターを押す。この頃にはもう、カメラのシャッターと閃光電球のフラッシュが同調(シンクロ)していた。

筆者の撮影が終わると、並行して走る位置を他社にゆずってやる。この時の車の運転手はなかなかの腕前で、他社の車と前になり後になって、多摩川は六郷の鉄橋を渡っていた。

大森警察署を過ぎたあたりだったろうか、寒夜だったのでソフト帽をかぶり二重まわしを着た人物が、突如として宇垣大將の車を停車させた。そしてほんの一瞬をおいて、大將の車に乗り込んでしまった。この人物こそ後になって

初め十六師団の入城式には、中島中將は積極的ではなかったが、幕僚の意見に同意を与え入城式を行うことに決したのであった。ここで筆者は、中島中將の入城式の写真が、どうして陸軍省の検閲で不許可になったのか、著者はあれやこれやと詮索してみたところ、青山学院女子短大・木村久邇典教授の著書『反骨に生きた帝國陸軍の異端児個性派將軍 中島今朝吾』(光人社)の中から、筆者を納得させる言葉を、発見できたのである。そして、偶然というものの、筆者が第十六師団に従軍し中山門から入城したことに、何やら運命的なものがあつたように思えてきたのであった。

中島中將と私

話は前年、昭和十一年の二・二六事件までさかのぼる。中島今朝吾中將は事件後に憲兵司令官に補されている。

当時、岡田内閣は広田内閣に代わっていたが、十二月一月二十四日、広田内閣が総辞職した。この夜、伊豆長岡にいた在郷の陸軍大將宇垣一成に大命が降下し、宇垣大將は急遽参内した。

大將の乗った東海道線の列車は、夜もおそかったので横浜駅止まり。やむなく大將は横浜駅で列車から降り、駅長事務室へ入った。東京の留守宅から参内のためのモーニン

わかったことだが、憲兵司令官・中島今朝吾中將その人であつたのだ。

木村教授によると、寺内陸相の言葉を伝えるために大將の車に強引に乗り込み、その伝言は「中堅幕僚が宇垣内閣に反対しているから、組閣を辞退してくれ」ということであつたそうだ。中島中將は大將の車から泉岳寺付近で下車、その後で大將の車は皇居へ向い、坂下門から参内したのであつた。

その後、宇垣は必死に組閣工作に努めたが、実を結ぶには至らなかった。その間、宇垣組閣本部には松井石根大將が組閣参謀として、活動していたのである。

宇垣大將が組閣工作に入ってから、三、四日した午後九時か十時ごろであつたらう。松井大將の自宅に中島司令官から直接電話がかかった。そして、

「閣下は宇垣組閣に協力されているようであるが、宇垣閣下がいま出馬されることは軍の総意として反対である。また不祥事勃発のおそれなしとせず。宇垣閣下には拝辞方を勸説申し上げている際であるので、閣下も大義親を滅するということ、とくとお考え願いたい」と呼号して、電話は切れたという。

こんないきさつから、松井大將と中島中將の不和が、いろいろと取り沙汰されていたのであつた。

中島師団長とはその後、拝眉の機を得なかったが、筆者

には昭和十二年一月二十四日深夜の東海道国道一号线での出来事と、十二月十五日の第十六師団入城式とが、見えないうえでつながれているように思えてならないのである。

中国の女に泣きつかれる

十二月十六日は晴天だった。社の車を使えたので、南京住民の姿をルポするために市内を走り回った。そして南京城外北東部にある玄武湖の風景写真を撮ったりした帰途、難民区分近くを通りかかると、何やら人だかりがして騒々しい。そして大勢の中国の女が、私の乗った車に駆け寄って来た。車を止めると助手台の窓から身を車の中に乗り入れ、口々に何か懇願するような言葉を発しているが、中国語が判らないからその意味は理解できない。しかし、それらの言葉のトーンで何か助けを求めていることだけはわかった。

彼女たちの群れを避けて、中山路へ出ると多数の中国人が列をなしている。難民区分の中にまぎれこみ一般市民と同じ服装していた敗残兵を連行しているという。憲兵に尋ねると、その数五、六千名だろうと答えたので、撮った写真の説明にその数を書いた。

この時の状況が『南京戦史』の歩兵第七聯隊（金沢、伊佐部隊）第二中隊の昭和八年兵・井家又一氏の日記にくわ

歩七の戦闘詳報によると、十二月十三日から二十四日の間に敗残兵六、六七〇人を射殺したと記されており、その大部分は十六日に処断されているが、それは歩七の前述の作戦命令によるものである。

歩七聯隊長・伊佐大佐の日記をみて、

「十四、五、六日ノ三日間デ六千五百人の敗兵ヲ嚴重処分ス」と記されている。

歩七の参戦者とは『南京戦史』編集委員が再度会談し、当時の状況としては掃蕩命令を忠実に実行したとのことであったが、最近（昭和六十三年末）同師団の土屋正治氏の質問に対し「今にして思えば、聯隊長の当時の状況判断については、痛恨の情に堪えない」と答えられた。

【南京戦史331ページ】

南京入城式

十二月十七日 晴

待望の南京入城式の日である。敵の首都を攻略し、入城するというのは、日本軍にとって未曾有のことである。

十二月十七日 快晴

午後一・三〇ヨリ入城式、特ニ暖キ快晴実ニ麗ラカニ終了ス。代表部隊ノ堵列閱兵、国民政府ニ於ケル国旗掲揚式、遙拝式、万歳三唱、御賜ノ御酒ニテ乾盃、海軍司令長官ノ発声ニテ万歳三唱。午後三・三〇頃帰ル、先ツ第一日ノ無事ニ済ミタルヲ喜ブ。

しく書かれていた。

拾貳月拾六日 午前拾時から残敵掃蕩に出かける。高射砲一門を捕獲す。午後又出かける。若い奴を三百三十五名を捕えてくる。避難民の中から敗残兵らしき奴を皆連れて来るのである。全くこの中には家族も居るであろうに。全く此を連れ出すのに只々泣くので困る。手にする、体にする全く困った。新聞記者が此を記事にせんとして自動車から下りて来る……十重二十重にまし来る支那人の為、流石の新聞記者もつひに逃げ去る。

難民区分から敗残兵を駆り立てた時の様子が如実に書かれている。便衣に着かえた中国兵を「処断」する情景を書いた他の兵士の日記もあるが、私は現場を見ていないので評論する資格がない。

私が自信を持って書くことができるのは、この眼で見た八十八師の宮庭での敗残兵の「処断」だけである。

十二月十五日午後八時三十分発令の「歩兵第七聯隊作命甲第一一号」には、

一、本十五日迄捕獲シタル俘虜ヲ調査セシ所ニ依レハ殆ト下士官兵ノミニシテ將校ハ認メラレサル情况ナリ 将校ハ便衣ニ更ヘ難民区分内ニ潜在シアルカ如シ

二、聯隊ハ明十六日全力ヲ難民地区ニ指向シ徹底的ニ敗残兵ヲ捕捉殲滅セントス憲兵隊ハ聯隊ニ協力スル等。

【飯沼日記】

筆者のように上海以来従軍した新聞記者にとって、敵国の首都への入城式を取材できることは、望外の名誉であった。それだけに、他社に後れをとってはならないと心にきめたのである。それにはどうするか、同僚の金沢君にも相談して、一計を編み出した。

まず中山門を写真画面の中に、必ずとり入れることである。松井大将を先頭にする將軍たちの背景に中山門を入れなくてはならない。したがって、中山門近くで高い場所が必要である。

前日の十六日に中山門近くまで行って、下見をしたが、カメラマンの登れそうな高い建物は無い。たとえあったとしても、將軍たちは堵列する部隊の敬礼に応え右手で挙手するから、顔が手にかくれてはいけない。そうすると、中山門に向かって右側の高い位置から、レンズを向けなければならぬ。しかし、高い建物は無いのだからどうしたらよいのか、それが課題だ。

よく見ると、中山東路の右側すなわち中山門に向かって右側に丈の高い電柱が並んでいるが、足がかりは見当たらない。こうして問題ははっきりしてきた。梯子を入手すればよい。しかし、陽のまだ高いうちに梯子を持って中山門近くをウロウロしていたら、必ず他社に感づかれてしま

うだろう。そういうことから、作戦としては夕刻に断行することにした。

連絡員一人に中国人の従者二名、合計三名で一班を編成し、高さ五メートルくらいの梯子を、どこからか入手して来る。梯子が手に入ったら中山門近くへ集合。

さて案はできたものの、梯子は何本ぐらい集まるか。イライラして午後四時頃、中山門の近くで待っていたら、来る、来る。中国人が梯子の両端をかついでやって来る。どう見ても電線の修理工のようだ。

撮影距離の見当をつけて、電柱四本を選んだ。一本目の梯子で撮ったら、急いで二本目へ移動できるように距離を置いて撮影場所をきめた。さらに第三、第四の場所を決めると、その電柱の下に梯子を横たえて置いたのである。

この夜、梯子係となる連絡員を集めて、入城式当日の段取りを決めた。すなわち当日は入城式の始まる午後一時三十分の十分前に梯子を電柱に立てかける。立てかけたら梯子の下に本社の特章を付けた連絡員が番をして、絶対に他社のカメラマンには使用させない。

定刻になった。松井方面軍司令官を先頭に、右後ろに朝香宮上海派遣軍司令官、左後ろに第十軍柳川軍司令官、中山東路両側に堵列した代表部隊から「頭右」「頭左」の号令。ラッパ手の吹く「将官ラッパ」（海行かば）のメロディーが三度流れる中を、堂々と閥兵が行われた。

「松井大將堂々の閥兵」

「空・陸に展く豪華絵巻」

「御颯爽・朝香宮殿下」

「殊勲の海軍も参列」

こうして電柱に梯子の作戦は成功した。ニュース映画のカメラマンも利用したが、ともかく本社独占だった。しかし、後日この時のフィルムを見ると、思わず「いけねえ」と嘆声が出たのであった。電柱の二番目、三番目で撮った写真を見ると、電柱に梯子のかかったままの写真があるのだ。用済みの梯子は、はずして下に横たえて置けばよかったのである。各梯子には本社の連絡員がいたのだから、あらかじめその由を打ち合わせて置けば、何のことはなかったのである。名案のつもりが、千慮の一失とはこのことだ。今でもこの写真を見ると冷や汗が出る。

ところで、この栄えある入城式で、われわれ報道陣に対して、ある人物の顔は絶対に写さないようにと、きびしい指示が出された。その人物は第十軍司令官・柳川平助中将のことである。新聞報道の場合、〇〇部隊長、時には覆面將軍などと書かれていた。

国民政府内庭で行われた入城式典では、中央部に小高い台を置き白布で覆っていた。この台の上に松井大將、朝香宮殿下、柳川中将、長谷川海軍司令長官が立つ。式典はこれ

松井大將の一行は国民政府門内に入ったが、一方海軍でもほとんど同時に、長谷川支那方面艦隊司令長官、大川内上海特別陸戦隊司令官、近藤第十一戦隊司令官以下幕僚が揚子江岸の挹江门から入城、中央広場から国民政府に至る中山路に堵列した陸戦隊を閥兵の後、国民政府内の陸軍將星と相会した。

やがて「君が代」のラッパ吹奏のうちに、国民政府正門上に大きな大きな日章旗が揚げられた。どこからこんな大きな日の丸を持って来たのか、折り皺が見えなかった。木村伊兵衛氏が居合わせていて「振ちゃん、撮ってやろう」と国民政府の門前、大日章旗をバックに、一枚撮ってもらった。

この日章旗は、縦二十二尺六寸、横三十三尺一寸、日の丸の直径十四尺二寸の、木綿製の大国旗であったという。昭和十三年二月二十八日、松井大將がこの日章旗を靖國神社に奉獻されたと神社に記録があるが現存していない。

皇居遙拝、御賜の酒で乾盃。長谷川司令長官の発声で万歳三唱して午後三時半に式典は終わった。

昭和十二年十二月十八日付の新聞は、各社ともに特大の見出し文字を使い、入城式の光景を名文で書き綴っていた。見出しを並べてみると

「青史に燦たり。南京入城式」

「武勲の各隊・肅然堵列」

らの人を中心に行われるので、柳川中将の顔を除くことは不可能といえる状態だった。

そこで式典の全景は、筆者が国民政府の門の上から、金沢君は門内で撮ることにした。後日、「東京朝日」を見ると柳川中将だけ向こうをむいているので、顔はわからない。他の松井、朝香宮、長谷川の諸將軍はこちらを向かないまでも、顔が見える写真だった。

この時、外務省情報部の小川昇一書記官が団長となつて、情報部の後藤光太郎さん、かねてお付き合ひのあった木村伊兵衛さんのほかに、渡辺義雄さん、記録映画撮影の



国民政府の前で木村伊兵衛さんに撮ってもらった筆者の写真。保存が悪かったのでヒビ割れてしまった。



入城式後、国民政府内で寛ぐ四将軍。左から第三艦隊司令長官・中将長谷川清、上海派遣軍司令官・中将朝香宮鳩彦王、中支那方面軍司令官・大将松井石根、第十軍司令官・中将柳川平助。(小柳次一氏蔵)

カメラマン二名などのグループが入城式などを対象に取材に来ていた。

情報の入手に困っているようだったので、現地の宜撫工作の情報を知らせて、木村さんと一緒に取材したこともあった。

十三年三月に、銀座三越で開かれた「南京—上海報道写真展」は新聞写真とは異なり、なかなかの出来栄で、入場者も多かったようだ。筆者もこの写真展を見に行き、その時の印象を『一億人の昭和史・不許可写真集』に「不許可になった写真たち」の小文を書いた。

「南京占領の時、いちばんおかしい不許可は、ある軍司令官の名前を〇〇にし、さらにその顔がわからないように塗りつぶしたことである。この〇〇中将とは杭州湾上陸部隊の司令官柳川平助中将であった。

後日になって国内で南京占領の写真展が開かれ、多くの写真で皇軍の武威をたかめようとしたことがあった。もちろん陸軍省の後援だから、城壁で日の丸を振りながらの万歳の写真もある。ところが、国民政府の広場で行われた入城式の壇上で、松井大将を中心とした万歳の写真が問題だった。写真は一メートル×二メートルくらいのもので、人物の顔は誰かを識別できる大きさだった。松井大将を中心に、左に朝香宮、そして右の人物はなんとノッペラボーの顔になっているではないか。数多くの写真展を見

てきたが、人物の顔を灰色に塗りつぶした写真は、今までにこれ一回だけである。名前をかくした覆面司令官だから、写真にも覆面させたのだろう。へたな落語のオチにもなるまい。」

ところで南京陥落の日、十二月十三日中山門から城内へ入ると、中山文化教育館で一緒だった大宅壮一さんや中川紀元画伯、中村メイ子さんの父君、ユーモア作家の中村正常氏らの顔が見えた。入城式の日には、詩人の西條八十先生もやって来た。

西条先生は文藝春秋社発行の雑誌『話』に、入城式の光景をうたっている。

「誰も歌はず、もの言はず

太い金文字、石の壁

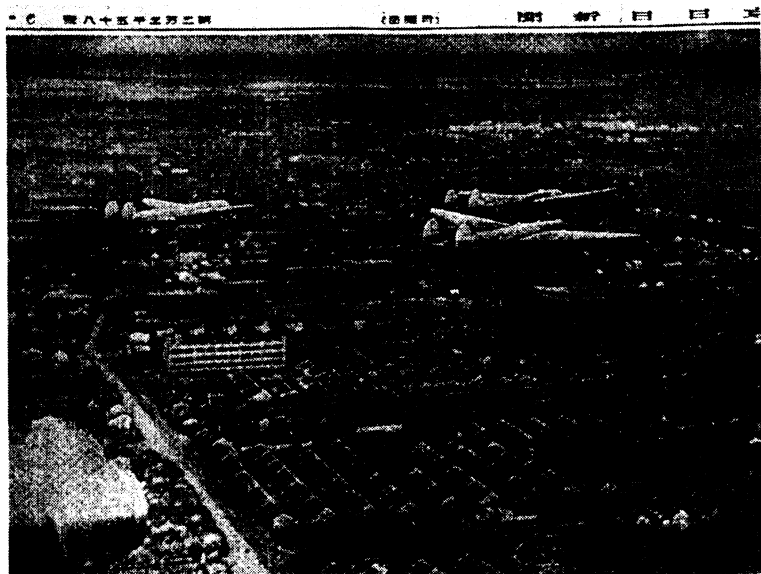
国民政府の城門に

颯と揚った日章旗」

これは「燦たり南京入城式」というルポ中の詩の一節である。

『皇軍大捷の歌』

南京入城式の情景は、十二月十八日付の各新聞ににぎぎしく報道された。さらに入城式の興奮いまださめやらぬ翌十二月十九日付朝日新聞は、南京陥落を祝う歌が決定し



12月17日南京入城式のニュース映画と新聞写真フィルムを福岡へ空輸するため本社の大蔵機が南京へ来た。この時、大毎写真部の高田氏が大蔵機から祝賀飛行中の中攻機を撮影した。

たと報じた。

朝日新聞社が『皇軍大捷の歌』を募集したところ、去る十日の締切までに合計三萬五千九百九十一編の応募作品が寄せられたのであった。

その中から入選歌および佳作五編を決定、入選歌は大阪在住の福田米三郎氏の作品で、千五百円の賞金と記念牌が贈られた。

「首都南京は 遂に陥つ

焼けた砲銃の 手をとめて

にっこり笑めば 隊長も

莞爾と見やる 城壁に

御陵威かがやく 朝日影

皇軍大捷 萬々歳」

寒かった慰霊祭

入場式の翌日、十八日には陸海軍合同の慰霊祭があった。式場は城内の故宮飛行場で、白布で囲まれた祭壇の中央には「中支那方面陸海軍戦病没将士の霊標」と、墨痕黒々と書かれ、上海から運ばれたと思われる供物がならんでいた。

各部隊の代表が整列した頃、雪片が舞い始めた。祭場に



戦病没将士慰霊祭で、玉串御奉献の上海派遣軍司令官・朝香宮殿下。

は四角い木製の植木鉢に立てられた真榊が並べられ、それに付けられた純白の四手が西北の風にあおられて音を立てていた。

あたりは静まり返って、しわぶきの声ひとつしなかったが、NHKの録音班の録音の合図だろうか「カッターおろします」という声が、周囲にそぐわない異質な響きで聞こえてきた。

定刻、午後二時になるとラッパの音とともに、陸軍を表する松井大将、海軍を代表する長谷川支那方面艦隊司令長官が姿を現わし、祭壇近くに着席した。一段後方に朝香宮中将、柳川中将、大川内陸戦隊司令官、さらに後方には各部隊の代表将士約五百名が参列していた。

身にしみる寒風の中で式は神式に則って進められた。松井、長谷川両指揮官の祭文が厳かに読まれ、両祭主の玉串奉奠。ラッパ手が「国の鎮め」を吹き鳴らす時、参列将士は一斉に捧げ銃を行い、慰霊祭は終了したが、特に筆者は東京で写真取材を競い合った「東京朝日」の浜野嘉夫君を想った。よきライバルだったが、彼は雨花台で取材中に戦死したのだった。

慰霊祭が終わると、南京陥落に関する一連の報道は完了したことになる。同僚の記者やカメラマンも、続々と上海へ引き揚げていったので、今までの旅荘では大きすぎ、小ぢんまりとした宿舎を探して引越した。

引越しいといっても、各自がリュックをかついで行けばすむので、いとも簡単。新しい宿舎は、洋風の高級住宅だった。コンクリートの塀にかこまれた前庭はポプラの林で、二階建て。玄関を入ると右側は広い居間、左側は食堂で食器棚の中はワイングラス、シャンパングラスなどがいっぱい。

玄関から入った正面に井戸のポンプがあって、屋上のタンクに揚水するようになっていた。しかしこのポンプは手動式で、使い方が悪いせいか全然水が出ない。そのために中国人の従者がどこからか持ってきた水で、洋式便所を使う不便さから逃れることができなかった。

三度の食事は、上海から追送される食料も豊富になったので、中国人のコックの料理で、満足することができた。

二階はベッドルームが六部屋ほどあったので、各自が好みの部屋を占領した。私は十七、八歳の娘さんのものだったと思われる部屋を選んだ。四周をピンクの壁紙で貼られた部屋は、殺伐とした戦場に三ヶ月を過ごして来た私にとって心なごむ心地がした。

部屋の持ち主の身の回り品は、すっかり持ち去られていた。後で聞いたところによると、国民政府財政部次長・徐漢氏の住宅だったそうだ。そんなことから、南京からの退去も手早かったのではなかったかと考えられた。しかし、持ち出すのを忘れたのか、ダークグリーンのビロード地に



入城式（12月17日）が終わる頃、難民地で宣撫班が菓子や煙草を配ると、多くの市民が集まってきた。

バラの花を染め込んだ、派手な中国服が一着だけ残されていた。

*

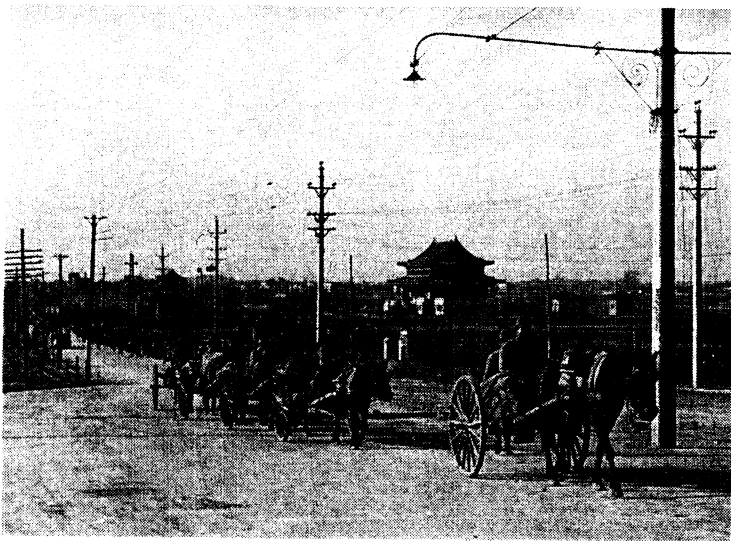
中山北路を北上した「安全区」と呼ばれるあたりでは、中国人難民の日常生活が開始されていた。日の丸の腕章を左腕に巻いた老若男女が日本兵を恐れることもなく、かしましく商売にはげんでいた。バイタリティーに溢れたその生活力には、ほとほと感心するばかりであった。

陥落から日数がたつと、軍の動きも変化してきた。すなわち、中国軍が破壊した橋梁や道路の修復もはかどったためか、中山東路、中山北路などに、日本軍のトラックが続々入ってきた。たまたまそれを撮った写真に、中国兵の死体が写っていたために不許可になってしまったのを、戦後になって初めて知った。

十二月二十日 陥落から一週間も過ぎたせいか、上海派遣軍司令官・朝香宮中將が光華門の戦跡を視察された。南京城一番乗りでその名を高めた、第九師団の脇坂部隊が、宮様隷下の部隊である。崩れた城門の下で、当時の戦況を聞かれる場面を撮った。御下問に答える将兵の顔には、軍司令官が宮様ということで、緊張がみなぎっていた。

この頃、上海から高名な作家たちが来たりした。その中

乗って上海戦の古戦場を通り抜け江陰で一泊。翌日は常州、金壇、句容を過ぎて、夕方南京へ着いてわれわれの宿舎に入ったのである。



第16師団の入城式後、師団の輜重兵聯隊・柄沢部隊は清掃された中山東路を通して城外へ移動した。

に紅一点、林芙美子女史がいた。林女史は気さくなうえに、一ヶ月以上日本女性を見なかったわれわれにとって、そのあでやかな姿はまぶしかった。高級住宅を宿舎にしていたが、問題の「水」は女史にとっても不自由のようだった。誰もその現場を見た者はいなかったが、記者の一人が前庭のポプラの木に原稿用紙を貼りつけた。

いわく「林芙美子女史脱糞の地」。

目ざとくこれを発見した女史は、「いやだわ、新聞社の人はすぐにからかうんだから」と笑って、その紙を破り捨てた。

林女史は南京から帰国すると、従軍の印象を単行本『氷河』の中に、「黄鶴」という題名で書いていた。

そのあとがき。

「私は正直に云へば、こうした素描習作の時代からぐんと大きく転換したいと念じております。私に転廻の気持を強くおこさせたものは、今度の戦争が強く原因してをりますけれど、私は先日南京まで行き、つぶさに戦場の跡をみて何だか人生感がはっきした気持になりました。暫くは口も利けないほど呆んやりしてをりましたが、とにかく、巻頭の「黄鶴」という作品を書いてみました。」

*

林芙美子女史は上海から毎日新聞の幌つきのトラックに

昭和13年 1 月の上海



南京陥落後、上海の共同租界へ多くの難民が流入した。中にはテロ分子も侵入するので、それを防止するため、「申請住戸証照」を交付した。その受け付けに多くの中国人が殺到したので、整理のためフランス兵や日本兵も出動。この時、林扶美子女史は、フランス租界の現場へ出かけて、フランス兵から何やら取材していた。(昭和13年1月)

昭和12年9月、日中両軍が呉淞クリークで、激戦を交わしていた頃も、共同租界には戦火が及ばず南京路は、殷賑を極めていた。南京陥落後も上海の繁栄を象徴するかの如く、昭和13年1月も車が、道路にあふれていた。



彼女は、南京は「乾いたやうな退屈な街におもった。南京の新聞地のやうな広い道路を見ると（これが本当の南京かしら）」と、がっかりした気持だった。」と書いていた。

来訪者の中には、豆戦車隊長の藤田実彦少佐もいた。「豆戦車」とは二人乗りの九四式軽装甲車のことで、操縦手と機関銃射手の二人乗りで、南京攻略では逸早く中華門に迫り歩兵に協力して大きな戦力となった。

「大毎」の松尾カメラマンが、藤田部隊に従軍して中華門攻撃の写真を撮っていた。そんなことから少佐は「大毎」南京支局をよく訪れた。たまたま私が中国軍将校の冬オーバーを入手して、それを着ていたところ、「佐藤さん、それをわしにくれんかね」と無心された。十二月も下旬となると南京でも霜を置くような気温になるのに、藤田少佐はまだ夏服を着ていたのである。階級章は中国軍の少将だったのを、少佐の階級章に直して着ていた。

南京も二十日すぎになると、平穏な日々が続いた。下関（シャーカーン）で、捕虜を始末したとかの噂を聞いたので現場へ行って見たが、それらしい痕跡は見当たらなかった。

正月用品と思われる四斗樽の菰かぶりが貨物船からクレーンでつり下ろされ、それを中国兵捕虜が運んでいたが、うっかり地上に落としてしまった。これを見た日本兵

戦場で見た野生動物

戦場の動物といっても、軍馬、軍犬、軍鳩などではない。砲弾が炸裂し、銃弾が飛び交う戦場では、野生動物は全くといってよいほど見かけなかった。

喪家の犬という言葉がある。飼主を失った犬が飢えに難儀する様を表わしているのだらう。われわれがチェコの銃撃を避けて戦場にとり残された民家の陰に逃げ込んだとき、犬までが日本人に敵対感情を持っているわけではないが、二、三頭で群れをつくって、われわれを襲うような素振りを示したことがある。その犬どもは口のまわりに血のりをつけていた。すなわちそのような物を食べたことになる。

犬だけではない。無人の民家からひっそりと出て来たネコもそう。ネコ族特有の獲物をねらうとき四肢を静かに運んで行く、あのポーズである。人間を襲うことはないだろうが、ネコの眼差しは不気味に光っていた。その不気味さをいっそうかき立てたのが、口のまわりの血のりだった。

戦場で、たった一度だけ野鳥の姿を見たことがある。場所はずいぶん遠くから二キロばかり離れた、楊行鎮の近くだった。ここは第一線の激戦地から離れていたせい、小

が銃床でなぐりつけるのを目撃したが、何もそこまでしなくてもと思わせられた。

慰霊祭も終わり公式行事も無くなったので、市内を車で取材した。難民区や南部の市街地帯には、爆撃や砲撃の跡は少なかった。北部の海軍部や交通部のあたりは、街路上にまだ物品が散乱しており、このあたりから挹江門にかけて、中国兵が城外へ逃れる時に民家を荒らしたらしい。

時折り、市街で小火災が発生していた。原因は明らかではないが、市内の警備状況は万全とはいえなかった。ともあれ戦争に負けるとはこういうことか、よくよく思い知らされたのであった。

陥落後日を重ね正月も間近に迫ると、次第に落ちついた日常となった。十二月二十三日、藤田豆戦車隊で餅つきがあるというので、迎えの車で行ってみた。豆戦車隊は燃料等を運ぶためにトラックを持っているせいか、白米など物資が豊富で。迎春のスケッチとして、軽装甲車をバックにした餅つきの写真は悪くない出来映えだった。



上海戦は塹壕戦の連続であった。前線で戦う戦友へ後方から食糧を運ぶ兵士の列の上、晩秋の戦場の空高く浮かぶ雲に、しばしの郷愁が……。 (10月13日撮影)

鳥が鳴き渡る声に似た流弾。たまに目標からはずれた迫撃砲弾の炸裂音くらいで、意外と静けさが残っていた。

日本のカラスより小ぶりの鳥が枯れ枝にいた。全身真っ黒なカラスと違って胸から腹が白くピョンピョンと跳ねて歩いていた。近くにいた兵隊に尋ねると、「カササギ」の仲間だろうという。

カササギはカラス科の鳥で、日本では佐賀県、長崎県に野生していて、天然記念物になっているという。鳴き声も立てずに、樹木にかこまれた民家の方へ飛んでいってしまっ

た。南京戦も終わって杭州へ行った時のことである。杭州はほとんど無血占領だったので、上海―南京間の城市を戦火の中に占領したのとは違っていた。上海から松江（スンキャン）、嘉興、南潯鎮を過ぎ、刈り入れの済んだ田園地帯をワゴンで走っていた。

第百一師団も主力は上海へ移動していて、このあたりに日本兵の姿は見えなかった。天気も良く、なごやかな景色が戦場を忘れさせてくれた。

トラックの助手台に乗っていた私の目をとらえたのは、大きな野鳥の姿だった。畑の中にいたのだが距離三〇〇メートル、ちょうど護身用に分捕り小銃を持っていたので、トラックを止めてこの鳥を狙った。軍事教練の時の要

ツアイ チェン 再 見・南京

上海からの指令で、南京を去ることになった。十二月二十四日のことである。車は上海支局から来た幌付きの大型トラック。藤田戦車隊から正月用の品物を上海へ買いに行くトラックが出るというので、その後について行くことにした。

上海戦以来、長期間の従軍で疲れているだろうという同行の支局員や連絡員諸公の好意で、助手台に乗って行くことになった。しかし、運転手が眠ってしまわないよう、さらに道路事情が悪いから穴に前輪を落とさないように気をつけよ、という任務が課せられたのであった。

出発は午後三時、黒い中山門をくぐると、暮れるには早い薄墨色の午後の曇り空の下、紫金山の山波が連なっている。中山陵の建物は灰色に孟宗竹でカムフラージされているのではっきりとは見分けられないが、十二月十三日、東凹子の中山文化教育館から、夢中で急な坂道を登った記憶がよみがえった。東凹子から大宅壮一さんを迎えに行った。社の前線本部は五顆松に在った。

冬の日は暮れるのが早い。車のヘッドライトは光っているのだが、どこが五顆松か見当がつかない。道路に穴があら

行軍の途中で、中国人の民家で小休止。たまたまロバがいたので、しばし童心にかえってドウドウ。



領で引金を引いたが照準は全く外れ、鳥は少しも動かなかった。あとで考えるとハゲワシの一種だったかもしれない。

上海から南京までの一ヶ月間、スズメの鳴き声ひとつ聞

せる。

南京から上海まで、この道を連絡員はオートバイを飛ばして行ってくれたのだろうが、悪路を走ってみるとその苦労がわかる。来る時は丹陽から来て句容の手前で右折したので、ここが句容ですと言われてもわからない。上海戦線とちがって小高い丘が時々見える。しかし、途中は全く光が見えない。

行く手に城壁が見えてきた。丹陽だ。警備の部隊がいるのか燈火が見える。しばらくすると呂城鎮だった。真っ暗な道路が続く、穴を避けながら車は進んで行く。呂城の次はたしか奔牛鎮。このあたりの道路は全く知らない。江南運河と呼ばれる大きなクリーク沿いの細い道を、一列になって歩いたのだ。そして丹陽の方向に大きな火事の煙が空に流れている写真を撮った覚えがある。クリークでは住民のジャンクが、戦場になる丹陽の方角へ急いで行くのを不思議に思ったりしたのだ。

左右の風景は全く見えぬ夜道となった。ヘッドライトの光の中の路面に眼をこらして、時折り見える穴を運転手に知らせながら車は進んで行った。後ろの荷台には三、四人乗っているはずだが、みんな眠りこけているようだ。

常州を過ぎると次は無錫だ。中国兵の攻撃が激しくて、協坂部隊長と民家の陰にカン詰になったひと時を思い出した。ここで従軍記者二人が戦死。筆者はチェコ機銃に追わ

れて逃げる途中で溝に足をとられ、左膝をひどく捻挫して第九聯隊の富山大隊について磨盤山を越える時に難儀したのだった。

無錫を過ぎると次は蘇州だ。この無錫―蘇州道は通ったことがない。蘇州から鉄舟で航行したからだ。だから、所々の石の橋や土堤だけしか見ていないわけである。

やっと蘇州へ着いたところでひと休み。南京から持ってきた飯盒の飯をボソボソとかきこんで腹を満たす。

蘇州まで来ればもう上海は近い。道路は広くないが次は崑山だ。しかし筆者は蘇州から崑山の道路は知らない。去る十一月二十一日、鉄道線路の上を歩いて蘇州へ来たからである。自動車道路は狭く凹凸がはげしい。道路沿いに大小の湖があるはずだが、夜目には見えない。運転手の話だと、連絡員として何回も通いた道だそう。

「佐藤さん、穴に気を付けて下さいよ」とハッパをかけられたころ、夜はもう二時を過ぎていた。崑山を過ぎるあたりは、呉淞クリーク戦の古戦場だ。民家もあり見当たらないが、夜明けが近くなって来て周囲がボンヤリと見え出した。昔は綿畑だったのか、起伏の少ない平地が広がっている。その中を道路が一本、上海へ上海へと延びているのだ。

運転手が「見えてきた」というので、はるか東の方に目をこらすとまだ夜のとばりが残っているが、真茹の無電塔

らしいものが見える。そして、共同租界の光も東方の雲にボンヤリと反射している。

南翔や真茹は、呉淞クリークの渡河で苦戦を強いられた古戦場だ。そこを一気に通り過ぎると、虹口の日本租界。支局前に到着したのは午前五時。やっと帰って来た、生きて帰って来たという自分ひとりの安心感と喜びを味わうことができたのである。

考えてみると蘇州へ行くために、まず崑山へ出発したのが十一月二十日。そして、南京入城を果たして南京を出発したのが十二月二十四日。その間三十四日、一回も入浴はしていない。飯盒炊さん用に、七合入りの水筒の水は貴重品だった。クリークの水、溜池の水は不潔だったので、歯磨きは水筒の水を使わなければならぬが、その間四、五回も歯を磨いたろうか。歯を磨いた後の爽快感を味わうどころではなかった。

体に付けた下着などはどうだったか。なんといっても襦だ。これは越中襦を五本用意していたのを全部使い切った。したがって一週間に一本となる。そして、たまたま洗濯のできるような、水が澄明な溜池やクリークがあると、洗顔用セッケン一つだけしか持っていなかったもので、これで洗った。白い布が敵兵に狙われる心配のない時は、リュックに紐を結んで歩きながら、にぶい冬の日ざしで干したものである。

歯磨きや洗顔は、よほど水がきれいなクリークでもなければ不可能だった。民家の土間で焚火をして、暖をとっている時、少しぐらい濁った水でも水筒いっぱいにして焚火のそばに立てて置く。沸騰すると、蓋をして、不時の出動の時にもあわてぬよう、リュックに熱いまま結びつけていた。

南京から上海へ帰って、いちばんのご馳走は入浴だった。支局の四階に六、七人いっぺんに入れる風呂場があった。

かかり湯をして、顔や手足、体を洗ってから湯舟の中に入る。四肢をのびのびと伸ばして足の先を見ると、異様に白い。一ヶ月余り空気にふれることなく、ましてや太陽の光を浴びることのなかった足だ。しかし、途中でへたばることもなく、よく歩き通してくれた足だ。

入浴の圧巻は頭髮のよごれだった。湯をかけた頭に固形の洗顔用セッケンをこしこしとこすりつけ、両手で髪をもむようにすると泡が立つ。その泡を指先で頭の地肌にしすりこむようにしてから湯で洗い流すと、流れる湯は赤茶色だ。

もう一度セッケンをつけて洗っても、流れる湯は赤茶色。三度、四度と繰り返すうちに、疲れてしまったので止めにした。

考えてみると、汗と脂と焚火の煙がしみこんでしまっ



その場にひっくり返って小休止。レインハットは汗と脂で真っ黒である。

いたのである。身体の方は二、三回ごしごしとセッケンで洗って、どうやらきれいになったが、頭の方はあきらめることにした。

着替えの真新しい肌着の感触は、生きているという実感をしみじみ体に味あわせてくれた。

上海へ到着した時、日本旅館の辰巳屋を宿としていた。上海戦がたけなわになると、内地から社の仲間が続いてやって来て、辰巳屋も手狭になった。ガーデン・ブリッジ近くのイギリス系のアスター・ハウス・ホテルが、素泊まりの客を入れるようになった。そこで、十月十九日ここへ移っていた。一日三円。

南京へ行く時に荷物を部屋に置いたままだったので、支局で朝食の後ホテルへ帰った。上海を留守にしていた間に、このホテルでもいろいろとサービス部門を整えていたようだ。その中で、筆者が真っ先にとび付いたのはバーだった。

南京へ行く前から髪をのばしていたが、前線生活が長かったからポマードなどもつけていなかった。のびた髪を切り、いよいよシャンプーだ。湯で流すと赤茶色に変色した。二回、三回とシャンプーした床屋の主人はあきれ顔で、

「お客さん、どちらへ行かれたんですか」と尋ねた。

「一ヶ月くらい前から南京へ行っていたのでね」と返事す

第百一師団の杭州占領

十二年九月下旬、第百一師団に従軍して上海に上陸。呉淞クリークの激戦の後、戦局は南京方面に伸びた。その間私は白茆口の敵前上陸にも従軍したが、本来の第百一師団に従軍する機会はなくしてしまった。

歩兵第百一聯隊は呉淞クリークの渡河戦では、加納聯隊長戦死という悲報も伝えられた。第百一師団は特設師団で、現役兵は少なく予後備兵がほとんどだったことから、損害を多く出す結果を招いたようだ。

南京陥落は全国民待望の朗報であった。十二日夜、早くも松井大将の留守宅のある大森山王の地元、新井宿中町の有志二百余名は、手に手に提灯をかざして門前に集い、松井家では風邪を押し切って文子夫人をはじめ一家総出でこの祝いに答えた。(東京日日新聞十二月十三日報)

この提灯行列のニュースは、社の無電を通して知らされた。しかし、上海・南京と激戦を重ね南京占領を果たさずに散った英霊のことを考えると、私たちは内地のお祭り騒ぎとも思われる行事を、むしろ苦々しく感じたのであった。そして、今後も続くであろう戦争の重さを、戦地に在って実感として受け止めざるをえなかったのである。

また、筆者が中山門一番乗りの喜びを、郷土部隊・第百



12年9月25日上海へ上陸。以来従軍生活約4カ月、やっと南京中山門上に立つことができた。城壁上の日の丸の旗は、喜びを現わしていた。

ると、さもありなんとうなずいていた。たいしたヒゲではないが、ヒゲを剃ってもらおうとやと人並みの人間に戻ったような気がした。

あとは寝るだけだった。昨夜の南京から今朝の上海まで、十五時間、トラックの助手席でナビゲーター役をつとめてきたので眠い。ホテルの軟らかなベッドに入って昼寝だ。チェコの銃声も、迫撃砲弾の音も無い。安全だ。前後不覚に夕方まで、グッスリと寝込んでしまったのである。

一師団の将兵とわかちあうことが出来たなら、多少は違った感慨を抱いたかも知れない。上海の租界周辺の警備だけで、師団の使命が終わってしまうとしたら、残念これ以上ものは無いと思っていた。

こうした折り、第百一師団にとって待望の命令が下った。

滬杭鉄道(上海、杭州間)方面にいた敵は、杭州方面に後退し、臨平―徳清―武康(杭州北西約三九杵)―莫干山の線に陣地を構築し、十二月初旬、その兵力は張発奎指揮下の約五〇師のもの、わが進攻に備え盛んに交通線を破壊していた。

方面軍及び第十軍は、兵力の関係上、杭州の攻略は南京攻略後に行うよう考えていたが、十二月七日の大陸命に基づき、方面軍は一部をもって同地を攻略するに決し、上海警備に任じていた第百一師団(上海周辺の警備に任ずべき旅団長の指揮する歩兵三大隊欠)を第十軍司令官の指揮下に入れ、同司令官をして、同師団及び隷下兵団の一部をもって速やかに杭州を攻略するよう命じた。

よって第十軍司令官は、ただちに第百一師団主力を上海から湖州に招致しかつ第一、第二後備歩兵団に作戦準備を命じた。ところが十一日、方面軍から、杭州攻略後第百一師団は上海に帰還させること及び第十軍司令部は杭州に位置することなどが内示された。よって軍は、将来杭州に駐屯する隷下兵団を加え、軍主力をもって一挙に攻略するのが適当であると判断し、第十八師団を南

— 638 —

杭州城・完全占領

宝叔塔上・日章旗翻る」

〔上海本社特電〕(廿四日発)

「午後六時上海軍発表表わが軍は廿四日早朝南宋の旧都杭州城を占領・宝叔塔上高く日章旗を翻し萬歳の聲西湖呉山を震撼せり」(写真は杭州の宝叔塔)

〔上海本社特電〕(廿四日発)「杭州城の陥落は南京占領後の次期作戦における第一段階を終ったもので廿四日杭州北方長橋方面及び富陽を突破して猛進撃を続けた野副、小堀、片岡、藤山の各部隊は敗走する敵を急迫して一斉に杭州を占領するにいたった。」

〈野副は歩兵第五十五聯隊(大村)、藤山は歩兵第五十六聯隊(久留米)、片岡は歩兵第百十四聯隊(小倉)、小堀は歩兵第百二十四聯隊(福岡)、以上第十八師団(久留米)の歩兵である〉

「また杭州東北方から攻撃中の福井、津田、谷川の諸部隊前に滬杭甬鉄道沿いに猛進した〇〇部隊も相前後して杭州に入り直ちに残敵を掃蕩、午後三時過ぎ死物狂ひに抵抗した敵を全く一掃した。かくて杭州は作戦行動開始以来僅か三日にして完全にわが軍の占領するところとなった、杭州は名所旧蹟を誇る南宋の旧都として知られ、その陥落は浙江省の全面的放棄を意味し、これによって中支方面におけるわが軍の武威は揚州東北方邵伯鎮及び縣北方張八嶺の

真冬のことだったので、西湖の風景も寒々として印象に残るものは少なかった。南京攻略戦時の緊張した日々の疲れが、身体の中に深く蓄積していたせいかもしれない。

杭州攻略は、ほとんど戦さらしい戦さもなかったため、魚や野菜などの市場も開かれていて、市民生活に戦争のにおいは希薄であった。

征旅四ヶ月、昭和十三年二月再び東京の土を踏むことができた。皇軍将兵諸氏に助けられて新聞カメラマンとして従軍写真報道の任務を果たせたことは、感謝して余りあるものがある。

「写真は歴史の目撃者である」といわれる。

撮影時には、そうした意識は無いのだが、後日になって一枚の写真が、歴史の「コマ」を語ってくれることがある。たとえば「駐軍八十八師司令部」営門の写真がそれである。

この稿を終るにあたって、尊い命を捧げられたわが将兵に、またよく戦って倒れた中国兵・戦火の犠牲となった中国の人びとに対して、哀悼の意を表したい。

合 掌

占領による江北戦線の拡大と共に江蘇、浙江、安徽の三省を完全に席巻するにいたった。」

ともあれ、各社の特派員は南京攻略の報道に忙殺され、杭州攻略に特派員を派遣する余裕もなかったのであった。筆者も、第百一師団の記者として従軍しながら、杭州攻略を報道できなかったのである。

なお杭州からのニュースとしては、『糞尿譚』で第六回芥川賞を受賞した火野葦平氏の授賞式が、十三年一月二十一日杭州で、現地へ派遣された選考員の一人である小林秀雄氏によって行われた。火野氏は一兵士として従軍していたのである。

十三年一月になって、田知花上海支局長のはからいで、杭州へ行くことになった。十三日上海発、支局員・鶴殿君の運転だった。この日は嘉興止まり。鉄道部隊の宿舎に泊まって、翌日、南潯をまわって午後四時、杭州に着いた。

十五日は中国兵と対峙している富陽の第一線へ行った。塹壕から顔を出すと、チェコ機銃を射って来たが、その程度で上海戦線のようなことはなかった。

十六日は岳王廟や雲林禪寺に詣で、骨相学による占いをみてもらったりした。まるで観光旅行であった。そして、十七日上海へ帰った。

佐藤振壽略歴

大正二年二月二十日生 東京都出身

昭和七年二月、東京日日新聞社(現毎日新聞社)入社 写真部勤務。

昭和十二年九月より十三年二月まで、日中戦争上海・南京戦線に従軍取材。

昭和十四年二月より十一月まで、南支方面部隊に従軍取材。

昭和十六年十月、病氣のため退社。

昭和十七年一月、財団法人写真協会入社、カメラ雑誌「報道写真」編集部勤務。

昭和二十五年九月、GHQ・CIEより民主化教育用視聴覚教材の制作などを研修のため、ガリオア資金により渡米。

昭和二十九年五月、政府広報グラフ誌「写真広報」編集に携わる。

昭和三十六年五月、時事通信社政府広報グラフ誌「フォト」編集部勤務。

昭和四十年五月、時事画報独立、「フォト」編集長となる。

昭和五十四年十一月、時事画報退社、在社中より写真評論、写真技術などを執筆、現在に至る。



待機ソ聯製機百五十臺

[illegible]

金壇城に突入し大激戦
日清戦争を中絶し、一舉に金州と遼陽の二大野戦、助川等の諸部隊は一日午後一時金州城に突入し、
 大激戦を演じつゝある

丹陽の殘敵と猛市街戦

〔主將百鳥雲全盛〕中増橋より一舉に金原に迫つた大野、助川等の諸部隊は二日午後零時半金原城に殺伐激と大激戦を演じつゝある。

半狂亂の南京城内

[illegible][illegible]

スペイン新政府も
満洲國を正式に承認

けふ相互に通告文交

中央軍四十萬で防衛
蔣自ら抗敵總司令に就任

上海本報特電（日發） 漸の如き皇朝の崩壊はこれをさへ（きる）何物もなく我が軍の意欲既に南京を占むの機あり。今月中旬（ころ）には南京城西の（日發）嶺へるものとさへ期待されてゐるが、外人方面への報道によれば南京城内は今や全く一大災癘と化し、餓殍自ら路に倒れて立つて決戦準備に忙殺されてゐる、南京に通する各要路には鐵條網、懸鎖、トツカを他の防禦隊を十重廿重に構築し、住民は殆んど全部退出して城門は何れも堅く閉され、城内外のバス全部運轉中止、軍用トラックのみが砂塵を上げて終日終夜四方に馳驅して戰備を充つてゐるのみで其他の職員が事務をたつてゐるのみで戰備の物語つてゐる、電報、電話、水道何れも停止されてゐる、城内五局の郵便局に約三百五十名の職員が事務をたつてゐるのみで戰備の官公衆十割の職員は南京を脱出して影を見せない、郵便局員も既に下関は汽船十隻を雇ひて最後の五分間は南京を逃げ出さんとしてゐる、城内では毎日漢奸狩りにかゝつて銃殺されるもの數知れず電柱、街角等にはこれ等の鮮血に塗れた晒首が到るところに見られ、物資缺乏から貧民の飢死續出し饑寒道に横はるといふ慘状を呈し、それらの死體を喰ふ犬の遠吠にまじつて諸所に銃聲がひびき、暗黒、慘慘、國民政府の首都として繁榮を誇つた歴史の都南京は今や全く鬼哭笑々たる死の街と化してしまつた。

南京一大要塞化する

各地爆

【上海本】
敗戦に多大の打撃
十方一昨夜、
き勢をもつ
攻略、更に上

計時器
 開始の御贈答に好適
 時計店に陳列

の大衆を動行した
隊は一日に三回以上
飛び出し、夜半に
〇〇と名の巨艦を
襲撃を圖へた
「上海本社特選」
艦隊は連日午前十二
時、午後六時におけ
るに、艦隊は、艦
隊行した、艦隊は、
艦隊に大損害を與

各地爆

攻略更に

たが、
おまへさん

敗戦に多大の打撃

【上海本】

四

55

第二
夕刊
讀賣新聞

第二卷第一頁
一ノ三四五號區區東京
社聞新資讀
總編輯 印
人行

消防車も國産で、
 火の用心
 百×ニツサン
 タツトサン

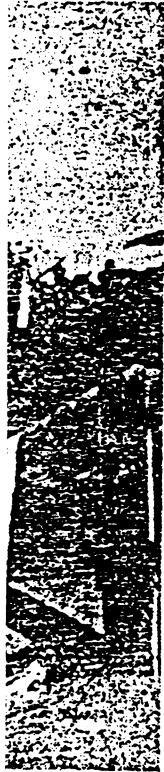
東京・銀座
日産自動車販売株式会社
1 御所倉は市の東部へ

四

哀れ落城寸前の南京 宛ら地獄繪卷を示現

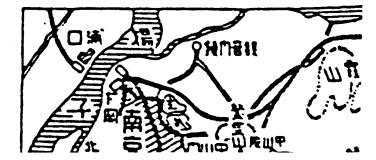
諸機關大邸宅も灰燼

【上海特電八日發】南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。



また、南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。

【南京八日發】南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。



城外要衝を確固 朝靄を衝き一

【清水鎮にて本社前線通信本部八日發】南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。



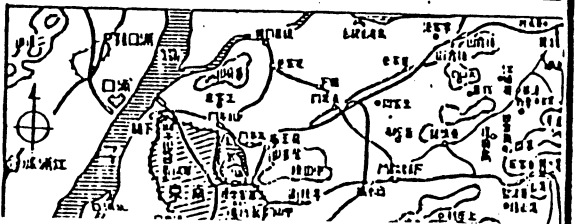
【南京八日發】南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。

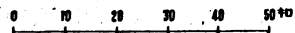
日本に渡す“廢墟南京” 狂氣支那の焦土政策

數十億の富抹殺(外國軍車專門家の觀察)

【ニューヨーク特派員八日發】ニューヨーク・タイムズ紙は、南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。

【南京八日發】南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。南京の陥落は、地獄の絵巻を示現する。その惨状は、落城寸前の南京に於いて、何時にても入城出来る状態となつた。





— 652 —

暫く時日を藉さん 民衆は反省せよ

松井軍司令官聲明

【第十八日午後四時】 松井軍司令官は南京における新聞記者の記者会見に出席し、十八日午後四時四十分、記者の質問に答へて、南京の陥落は、日本軍の勝利であるが、同時に、日本軍の暴行もまた、世界に知られた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。

○ 南京の陥落は、日本軍の勝利であるが、同時に、日本軍の暴行もまた、世界に知られた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。

○ 南京の陥落は、日本軍の勝利であるが、同時に、日本軍の暴行もまた、世界に知られた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。日本軍は、南京に侵入して、市民の生命と財産を保護する義務を負つた。しかし、市民は、日本軍の暴行を容認し、日本軍の暴行を助けた。

十二月十九日(日曜日) 東京朝日新聞

紫金山麓に悲雪舞ふ

きのう南京で戦死勇士慰霊

【南京二十日山崎通信】 紫金山麓に、戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。

白、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。

白、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。

白、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。

白、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。

白、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、紫金山麓に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。



光華門に偲ぶ軍神伊藤少佐

重傷の部下を小脇に

火中・慈愛の點呼

壁上に毅然、鮮血の像

【南京二十日通信】 光華門に、戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、光華門に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。戦死した勇士の霊を慰めるため、きのう(十八日)朝、日本軍の将校と兵士が、光華門に集まり、戦死した勇士の霊を慰めた。

南京陥落の年月

の一日誌

心臓を射る我輕氣球
正確彈雨に敵將茫然

巷を罩める血と藥臭

[illegible]

翼鵬の福祝

米輿論冷靜大結

政府聲明
海軍示

八一號事件真相大本營發表

日章旗振り爆撃阻止
我死傷顧ず救護奔走

支那船射撃を誤認か

[illegible]

ふは恐らく本隊を認識せしものなりと推察せられ、米隊に對しても時差ありなりと認め、米隊には追いつき及ばず引退せしむるを以て、米隊の前進の自體に對し米兵に對し向敵の勇氣を有せしむるを以て、米隊ととりつゝ第一線部隊の一般外人兵に米兵に對する深き同情は彼等避難者に對する獻身的教誨にこれを見るを得べし

英佛協議説を否定

【三月一日の新聞】マコド。は欠席中に防衛大臣を決定し、パリ紙の部長はメイナックスで、一、二日の如き、歌を歌明した。

不該府が地中海の南進力の一
翼を担いて中東方面に露頭を増
強するとした場合は、フラン
スが英艦に代り東域で地中海に



中支親日政權待望 列強の迷夢打破せん 松井司令官所信披瀝

【上海本社特電】(廿八日發) 中支における第一作戦は南京陥落に於て完了せる成果を以て今や本戦は第二作戦(南京攻陥)への作戦へと進めつつある。松井司令官は廿八日午後一時南京に於て記者の質問に答へて、第二作戦の進展に關し左の如き重要發言を發表した。

南京陥落後において我々はいさゝか作戦行動を停止してゐないことは北支及蘇州方面の作戦展開によつても知られた。たとへば南京攻陥までに行はれた戦闘は奉天會戦にも優る大會戦であるからこれに参加した軍隊を戦備するためにも相當の時期を要するわけだ、自分としてはこの時期を利用して支那の平定を急ぐ分子が南京に於ては既に終戦の形勢を察知してゐる。南京の陥落は明々たるものと希望してゐる。自分の見るところでは既に親日政權の生れることも遠くないであらうし、またかゝる親日政權の結成を見ない限りは自分は斷じてこの土地を去るを得ない。今日において國府の知見が支那の軍たり得ないことは明白であつてわが政府においても成るべく早い時期にこのことを聲明する必要がある。現在支那軍中に親日政府を樹て、また支那軍の進軍を阻むとしてゐるものがある。あるものは支那軍に對する現在の態度を打破し、軍中進軍の意を鼓舞するものもある。だがこのことは決して第一の野心から出たものではない、國の存亡を今更に懸念せんがためである。【要するに南京に於ける松井司令官電】

未明、野戰病院を脱出 重傷の身を南京へ 内地への送還を潔しとせず 長驅二晝夜茂手木少尉

長驅二晝夜茂手木少尉

未明、野戰病院を脱出
重傷の身を南京へ
内地への送還を潔しとせず
長驅二晝夜茂手木少尉

長驅二晝夜茂手木少尉



「逃げ方が遅れた!」と 米船長も謙讓の色 故意でない證據我方にも死傷者 西中佐踏査の真相報告

「逃げ方が遅れた!」と
米船長も謙讓の色
故意でない證據我方にも死傷者
西中佐踏査の真相報告

西中佐踏査の真相報告



大野氏の復職
けふの閣議に諮る

大野氏の復職
けふの閣議に諮る

診療
本診
午後二時

診療
本診
午後二時

南京へ!! 南京へ!!

——新聞匿名月評——

在上海 K・R・K

南京への興奮

南京へ南京へ、駒も勇めば、征士の靴も鳴る。勿論ジャーナリズムもさうだ。その全神経が南京へ集中、すべては南京のために計画され、用意された。大新聞はもとより、弱小地方紙までが、特派員の記事なしでは読者の受けが悪いとあつて、上海連絡船の着く毎に「敵前上陸」を敢行、鉛筆とカメラと食料とリユークサツク姿も物々しく、或は軍のトラックへ便乗、或は舟を利用し、或は徒歩で道は六百八十里何んのその、未だ敵の地雷の埋れた江南の野を南京城へと殺到した。南京包囲の報道陣——記者、カメラマン、無電技師、聯絡員、自動車運転手を合し、優に二百名は越えたであらう。ジャーナリズムのゴールド・ラッシュだ。

報道戦線の大拡張である。上海戦の膠着時代には夢想だにしなかつた発展ぶりだ。皇軍の連戦連勝で俄然ジャーナリズムは気が大きくなり、十二月九日の午後、大毎ロツクヒード機（大蔵飛行士）、読売B・F・W機（熊川飛行士）が長翔太刀洗より来滬、朝日の幸風機、鳳機と、「南京入城」の華華しい空輪戦を演ずることになつた。

設けてゐる。仕事には快適だ。気持よく働ける。米国仕込みの白川上海支局長の心遣ひでもあらうか。万事が応急的、出まかせ新聞戦の装備では群鶏中の一鶴だ。

要するに資本戦である。しかも国際都市上海なるが故に、資本を活用、手つ取り早く装備をなすを得た。若し上海でなかつたら、戦線が拡大すればするほど、従軍記者の手も足も出ず、全国の新間は軍の発表記事で一色に塗り潰されたであらう。辛うじて新聞は多彩を保つたが、それにはまづ「上海」へ感謝せねばならない。

資本戦といふ見地からだと、小新聞の特派員は惨憺たるものだ。が、資本の大小を問はず、前線の新聞人の苦勞は言語に絶する。大場鎮以降の追撃戦で、軍は破竹の勢ひで進んで行くが、後に残ると敗戦兵に狙はるゝ危険があるし、空腹を抱へ、雨に打たれ、足はまめまたまめ、否が応でも前進部隊にくつついてゐねばならない。稍々もすれば聯絡員とはぐれ、敵地に孤立の形だ。中には上海を飛び出したつ切り、軍と行動を共にし、一ヶ月余も帰らない特派員もある。紅顔に鬚茫々、天晴れの東郷さん、乃木さんになつてゐやう。幸ひ皇軍に絶対信頼が置けるからいゝやうなものゝ、外国の軍隊では出来得ない現象である。そして自由主義下に生ひ立つたモダン・ジャーナリズム、その青白きインテリ達にも南京への興奮——国家主義が芽生えたためであらうか？ 単なるニュースの獲得戦だとせば、一面情けなくなる。

ニュース・スピーディズム

伝へらるゝに、陸、海、空三軍の南京入城は昭和十二年十二月十九日の予定とのことである。その日の昼の十二時を期し、陸海諸将

た。勝敗果して何れぞ！

朝日機の使命は、日本と支那、支那と南洋との連絡飛行のパイオニアたんとするにある。寒風を載り、実際よく飛んだ。各社原稿の空輪にも甘んじて寛大さを示して来た。多分広義国防に対する広義宣伝戦への尽忠報国の気持ではあらう。それが南京占領といふ書き入れ時に、大毎機、読売機の出現で、驚に油揚をさらはれた結果になる。仮りに彼我立場を異にしてゐたら、頑強に朝日機の進出を阻んだに相違あるまい。だが、われらは軍の公平を喜ぶと同時に、朝日の雅量を讃へる。朝日の読者をひきつけるものゝ一つは、この余裕と、これから生ずる和かな陰翳だ。

新聞戦も実戦と同じく機械戦といはねばなるまい。各社相当な量の自動車を持ちつづしたが、猛り立つ闘争心の前、自動車なんか一種の消耗品となつてゐる。ここは呉の国、水郷とあつて見れば、南京攻略のため、朝日と同盟とはモーター・ボートさへ準備した。大場鎮陥落前、砲煙彈雨の中をくぐるべく、真面目に戦車の利用すら考慮されたのである。

読売もおそらくオペレートしてゐることであらうが、大毎、朝日、同盟は、戦線と上海支局との通信聯絡に無電を使用する。それぞれの策戦計画に基き、数台の無電機が戦線とどこに配置されるゝが、やがて「マルコニー」の一斉南京入城ともならう。が、科学必ずしも万能でない。時には故障が起る。無電機の健在、即ちニュースの勝利だ。この点、朝日は非常に恵まれたらしい。決して他社の機械は安物であり、技師が下手だとは限らないが。

それは無電台であり、移動支局であるものに、各社はトラックを用ゐてゐるが、朝日はバスを張り込んだ。座席を改造、ベツトをも

軍は南京城内で歴史的乾杯を挙げ、天地も砕けよとばかり万歳を絶叫するのだ。首都占領ともあらば、多少のゼスチュアがあつていい。これも余裕綽々の致すところで、一段と戦勝的意義が生ずる。従つてこの良き日が南京陥落で、それまでは新聞記者の恒例「一番乗り」もが禁ぜられねばならぬ。

戦争に礼儀があつても、由来礼儀を何処かに置き忘れたのが新聞だ。しかも戦国時代の名残か、スポーツ精神の履き違ひなのか、結局は安価な競争心ではあらう——従軍記者はやけに「一番乗り」をや、やけに日章旗を立てたがる。無論ニュースは迅速を生命とするが、徒らに速からんとするヨタ電は一利百害だ。上海戦線でも、大場鎮に、南翔に幾度か日の丸の旗が翻へりしぞ。そしてさんざヨタつた揚句、戦争ジャーナリズムは遂に「完全に占領」といふ術語を發明した。皇軍の威信を傷ける報道ぶりだ。

十二月七日の大毎（東日）の夕刊（即ち八日付）はまだ上海に届かないが、大毎特派員の電報によると、南京城外中山陵に日章旗が掲げられたといふ。同盟もまた紫金山頂に日章旗を立てた。で、喜んだのは読者、洪面をつくらざるを得ないのは他社編輯幹部だつたらう。わが社に特電なしとは不都合と、半ば詰問的電報を発したが、面食つたのは、その上海支局だ。皇軍の快足は今初めてのことでない。さては抜かれたなつ！ 意気込んで関係筋に当つて見ると、何うやら大毎、同盟のニュース・スピーディズムから出た亡霊らしくもあつたので、ホツと一息。

ニュース・スピーディズムは、一か八かのさいころ勝負だ。賽の目で、一の出る確率は数字上六分の一だが、実際問題ではなかなか以てさうは問屋が卸さない。で、始終丁を出すべく、いかさまが登場

する。事ここに至るとニユースはその本質を脱して、もはや創作以外の何物でもない。創作が電報化し、活字化し、ニユース化する。これは、道德の否定、現代科学への冒瀆ではないか。かうした「商品」を新聞と称せねばならない現実を悲しむ。

更に十二月九日、南京城内に日章旗飄つたとかの号外を発行した新聞があるさうである。お、南京入城！ それは新聞術語の「一角占領」であつても、待ちに待たれた会心のニユースだ。いざ祝へ！！提燈はやたらに勇んだ。所によつては、提燈行列が繰り出したかも知れない。

全然嘘とはいはぬ。残敵掃蕩なんかで、多分城内に入つた部隊があつたであらう。が正式の入城日までは書けない約束の下に置かれてゐる。約束は議會を通過した法律ではないが、今の議會より寧ろ貴い戦地協定だ。かくまで無理し、販売政策に迎合せねばならぬものとせば、一沫の同情を捧げるに足るが。

その号外は、果然問題になつた。

目下は戦時だ。平時の全然逆である。新聞として余りに時局へ媚るのも見つともないことだが、といつて、例の気まゝ放題なニユース・スピーデイズムから軍機漏洩の行動に及んでは、それこそ国策を誤らせる。

こんなことから新聞の信用を失墜、より以上の統制ブレーキをかけられては、新聞の自滅は必然とするも、益々盲目にされる国民は如何にせんや。国家と国民と立脚する限り、新聞に自重が望ましい。

足の記事、心臓の記事

てゐたと、まるで吉本興行部の種本、心臓で書かれたニユースだ。

村田読売東亜部長が古巣上海へやつて来た。皇軍慰問を兼ね、また南京を目指し、カーキ色に身をかため前線へ出たが、何だか斎藤実盛が思ひ出されてならない。正力君も相等酷な人の使ひ方をする。だが、本当の支那ニユースらしいニユースを読める期待は、一人月評子のみでもあるまい。

蘇州陥落は軍の報道班はもとより、各社支局にも分らなかつた。前進また前進、従軍記者がニユースを聯絡員に托する連のないほど、皇軍の行動は疾風迅雷的なのだ。快報を齎したのは、朝日の石崎君、それも落ちてから翌日のことだつた。

石崎君は上海で有名な牧場主の息、国際都市にふさはしいスポーツマンだ。朝日のファンで、義勇軍的に聯絡員を買つて出て、自ら自動車のハンドルを握つては何処へでも飛んで行く。市政府の一番乗り、モーター・ボートに徳川義親侯を乗せ、蘇州河を溯行、蘇州をも訪れた。この石崎君が蘇州陥落のニユース（記事・写真）を携へ、蘇州太倉間の十六里をマラソン、太倉から自動車、泥濘の夜道をかけて上海へかけつけたのだ。しかも彼のスポーツマンシツプは、強敵大毎の川口映画班員を同乗せしめた……。

朝日には、かうしたファンが多い。ローカル紙では上海日報とがつちり「攻守同盟」を結んでゐる。もとは朝日の上海日報、大毎の上海毎日と、それぞれ分野が極つてゐたが、後者は昨年の成都事件以来絶縁状態にあるらしい。この意味で、大毎上海支局は孤軍奮闘といった形、何んとかく間口が狭くなつた。

大毎は上海銀行の樓上にオフィスを持つ。昨年文路の「古城」から引越したのだが、当時広過ぎて、今では超満員だ。それに支那

戦線が拡がるにつれ、一時、ニユースが何うなるかと思はれた。戦線と上海との連絡絶、場所によつては、従軍記者の生死さへ不明だつた。あいつのことだから、まさか支那兵にやられまい位のところ、でも、蘇州陥落後において朝日二人、読売二人の犠牲者を出した。大毎にただ一人の犠牲者のないのは幸福だ。

十二月八日、南京攻略の第一線で朝日写真班浜野嘉夫君が名譽の戦死を遂げたが、その地点の近くに朝日の無電が配置されてはゐない。で、戦友藤本君（名古屋支局）が同盟の無電に頼んで悲報を上海支局へ伝へた。同盟と朝日、昨日はニユースの敵でも、今日は完全に同盟である。なほ浜野君の遺骸を現地で茶毘に附し、藤本君、その遺骨を背負ふて南京入城の喜悅を共にすると。嬉しくも涙ぐまる戦地風景哉。

朝日関係八十余名、大毎関係七十余名、これだけの人員を戦地に動かせば、白川朝日支局長、田知花大毎支局長は、第二流新聞の社長格だ。しかし人物からでは、白川君の方がずっと上だと、上海雀がさへづつてゐる。朝日では吉田英治君、面倒な庶務の仕事を引受けて、いゝ女房ぶりを発揮、水も洩さぬ陣営を張つてゐるが、大毎には金子君（東日）が編輯局長で、これまた老練なタクトを振るのだつた。大毎・東日では、北支を大毎系、上海を東日系で守る。

ビツグ・スリー中、読売は最も手兵が少いやうだ。その上、イエロー・ペーパーは読売のモットーなのか、現地で見てゐると臍のあたりがもぞもぞする「創作」を平気で書きなぐつてゐる。

話はチト古いが、未だ占領前の南市、しかも読売一番乗り、折ふし暗さは暗し、漆黒の闇だつた。そこで読売氏、漢奸連の銃殺を見たんだが、既に殺され、樹枝に吊されてゐる首に蠅が真黒にたかつ

の弾丸も来なかつたので、朝日や読売のやうに支局を安全地帯（朝日は万歳館ホテル、読売はピアース・アパート）に移す必要もなく、経費の節約上からでも大したものだ。大毎会計が田知花君に「感状」を出すがいゝ。でも、戦雲収まり、こちらから勘定を送ると、各社の会計目を丸くして「戦費」の意外に巨額なるに驚くであらう。上海戦には国もかゝつた。新聞も御多聞に漏れない。

都新聞はアスター・ハウス・ホテルを本陣となし、小じんまりと世帯を張つてゐる。自動車なども貧弱だ。しかし自動車に豊富に使へたら、おそらく塚本寿一君（政治部）が号外戦で大勝を博し得なかつたであらう。新聞は足で書かなければならぬ。

十二月三日、わが陸軍の南京路デモ行進の時だつた。ある予感を持つた塚本君、軍隊と一緒にテクつてゐたが、他社は自動車だ。小癪に触りながらも、なほ歩いてゐると、例の手榴弾事件の現場を目撃したのである。で、その足で早速郵便局へ駆けつけ、まづ第一報——それがとんとん拍子に早く東京本社へ到き、堂々他社を圧し、号外の鈴を鳴らした。事件そのものは芳ばしくないが、塚本君の真面目さに神がビツグ・ニユースをはなむけたに相違ない。

同じ足でも、こんな奇怪のがあつた。九州某紙の特派員、上海市街戦のたけなはな頃彼は毎日弁当を持つて戦線に出かけ、夕方疲れて宿へ帰るが、今日の戦況は黙して語らない。といふのは語れないのだ。戦争が恐ろしく弾丸はおつかなく、彼、市中の安全な通をうろつき、弁当を食ひ、夕闇迫れば御帰館あらせらるゝ。そして記事はローカル紙から失敬し、うまく辻褄を合はして置く。つまりは心臓で歩（書）く人種である。

如何に丹念に足で書いても、海底線が不通の場合がないではな

い。和文電報がきかないのだ。そこでデンマークの大北電信といふ手があるのだが、一時ローマ字電報を受付けなかったたので、英文字に事を欠かない朝日、大毎、同盟に先手を打たれる。

上海合同新聞

時局の波は、遂に上海邦字新聞を合同せしめた。法律的な合同ではないが、少くとも合同の形式を取つてゐる。即ち上海日報（社長波多博君、明治三十六年創刊）、上海日日新聞（社長宮地貫道君、大正三年創刊）、上海毎日新聞（社長深町次郎君、大正七年創刊）を打つて一丸とし、ここに上海合同新聞の誕生を見た。

その理由とするところは、未曾有の事変に直面しながらも三紙鼎立、おのおの新聞を発行してゐたのでは経営難を招来、結局は自滅の外ない。しかも半頁のボロ新聞では、対支上、対外上からしても邦字新聞たる面子にかかはる。のみならず、現地に妥当適切な輿論を喚起せねばならず、「長崎県上海市民」に時局の重大性、その普遍性を認識せしめねばならず、軍官民一致の体制で時局に善処せねばならず、海軍、陸軍、総領事館、居留民団、紡績方面の要望と後援とで、ともかくの一応合同の形態をとることになった。

目下朝刊、夕刊ともに四頁、邦字新聞としての面目は曲りなりにも保たれてゐる。記事の生硬、これは止むを得ないが、次第に向上線を辿りつゝある。如何なる人の執筆にや、江南隠士の論説は多少のサーベル臭味なきにあらねど、支那事変の本質的意義、中支における日本勢力の新建設（再建設に非らず）、対支強硬政策の提唱等々、大和心と現地心意気が断然光つてゐて、内閣諸公、殊に霞ヶ関には是非とも一読を願ひたい文章だ。

以て中支、南支の新情勢に善処すべきだ。言論戦は戦争の有力な一部ではないか。日本人は上海へ来て、床の間と風呂をつくることを忘れないが、非常に重大なものを忘れてゐる。

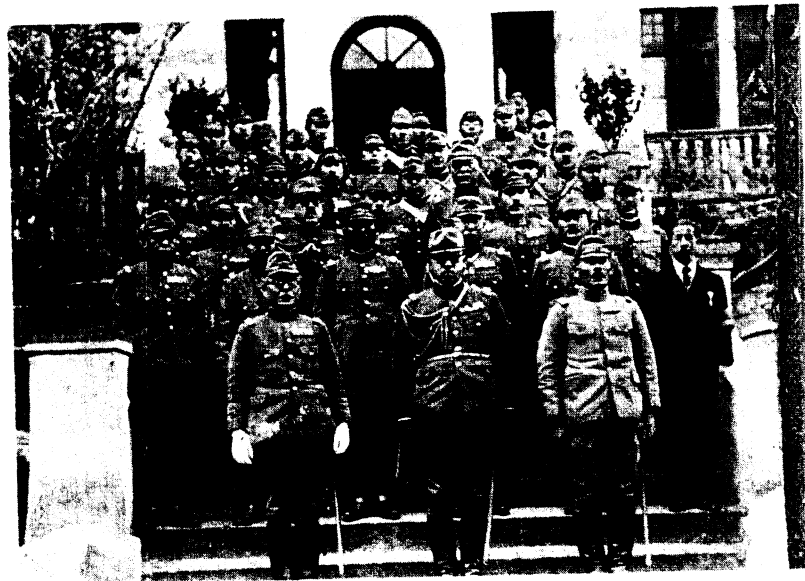
戦時の上海「日本町」は物価が高い。わけても食物はべらぼうで、いゝ加減な天井が一円、ライスカレー八十銭、やきそば八十銭、コーヒー三十銭といった風だ。東日、東朝、読売、大毎、大朝の各々四日分を買つたら合計一円二十銭也だった。運賃もかゝらうが、決して安いとは思はれない。無論戦時のせもあるが、上海の日本書店を除いても、支那に関する書物（日本語）の寂寥さよ。これで上海市民の対支態度、文化程度が推定さるるが、合同新聞の使用、また大なりだ。

その内地紙をひもどくと、未曾有の紙飢饉だといふのに、まだまだ贅沢な紙の使ひ方をしてゐるやうに感ずる。それがもつと節約されて上海へ廻つて来たら、現地言論戦は鬼に金棒でもあらうが：。（十一月十日）

で、合同新聞は、ムツソリーニ治下のポロ・デタリア紙の如き触感を覚えしめずに置かない。自由主義的なジャーナリズムからすれば、「官報」との非難も起らう。だが、これを目して、ジャーナリズムからの脱走とはいへないのだ。幾何学にユークリッドと非ユークリッドの存在するやうに、戦時ジャーナリズムは否定出来ない。しかも時勢が新聞に革命を強要するものとせば、多分こんなタイプを取るのぢやないかと思はるゝ。明日のサンプルを見せられたやうな気がする。

支那軍の大潰走で、抗日宣伝機関の周章狼狽は、寧ろ滑稽さを感じる。それにわが方の嚴重なる要求に基き、共同租界当局が鉄槌を加へた結果、それらは続々と停刊、若くは上海からの移転を断行したのである。即ち抗日宣伝の国策的機関中央通訊社は通信活動を中止したし、抗日人民戦線の機関紙救亡（国）日報は漢口へ移転、時事新報、立報、民報は停刊してしまつた。雑誌では、コミンテルンの半機関誌世界知識、婦人共産主義者沈滋九の婦女生活が停刊を余儀なくされ、諸外紙もまた論旨一変の傾向にある。

で、今や日本は言論の殲滅戦でも凱歌を奏しつゝあるのだ。次は追撃戦である。合同新聞は新申報といふ漢字新聞を発行してゐるものゝ、その日本語的漢文は支那大衆にピツタリ来てゐない。その拡大強化、その刷新は目下の急務であらねばならぬ。同時に良い英字新聞も欲しい。追撃の好機の到来してゐるのに、弾丸のないとは！かく観じ来れば、合同新聞の前途益々多事であるとともに極めて意義も深い。海外における新聞は、国家の看板であり、特務機関であり、外交機関であり、文化の媒体であり居留民の武器である。合同新聞なるもの、もつと資金を充実、人材を迎へ、設備を整備し



加陽宮恒憲王と第十軍司令部（昭和13年1月）